

近代中国求婚広告史（1902-1943）

高 嶋 航

は じ め に	51
I 清末民初の求婚広告	52
II 1920年代の求婚広告	56
III 求婚広告の分析	61
IV 求婚広告の意義	71
V 1940年の求婚広告	76
お わ り に	87

は じ め に

1981年1月8日、『市場報』に次のような広告が掲載された。「丁乃鈞、男、40歳、四川江津地区進修学院の数学教師。40歳以下で、心が善良で、家事をきりもりでき、正式の職業をお持ちの女性を妻にしたいと思います。関心がある方は手紙にて連絡ください。」丁はテレビを見ていて求婚広告に思い至った。文革中は恋愛について公然と語ることがタブー視されていたことを思うと、改革開放後まもない時期に出されたこの求婚広告はまさに破天荒な出来事であった。全国各地から300通を越す手紙が丁のもとに届けられ、丁は吉林の女性と結婚した⁽¹⁾。

丁乃鈞の求婚広告は、しかしながら、中国で最初の試みではなかった。中国における求婚広告の起源は清末にまでさかのぼることができる。清末の2件の求婚広告は多くの人びとの関心を集め、これまでたびたび紹介されてきたが、その後の状況について顧みられることはなかった。そこで筆者はかつて1920年代の『申報』に掲載された全ての求婚広告を収集し、分析をおこなった⁽²⁾。1980年代に求婚広告が普及した背景には政治的、経済的、

身体的理由により婚期を逃した大量の高年齢未婚者の存在があった⁽³⁾。これに対して1920年代に出現（厳密に言えば再出現）した求婚広告の背景には「自由恋愛」「自由結婚」およびそれらを実行するための「社交公開」の議論があり、求婚広告はこれらの理想を実現する手段として考えられてきた。しかし求婚広告の内容を分析してみると求婚広告には「社交公開」の議論で想定されていたような新しい婚姻観を反映したものばかりではなく、旧態依然とした婚姻観を呈示するものも少なからずあった。求婚広告は新しい婚姻観の理想を実現する道具であったが、また旧式の婚姻を補完する作用も果たしていた。求婚広告は多様な人々の多様なニーズに柔軟に応えることができ、それが人びとに受け入れられる鍵となったのである。以上が前稿で論じた内容である。

その後、趙良坤の修士論文「近代中国徴婚広告探析」を得た⁽⁴⁾。趙は1900年から1937年までの『大公報』を精査し、81件の求婚広告を収集し分析した。その結果、求婚広告は伝統的婚姻方式と対立する、透明で開放的な新しい婚姻方式であり、家長制の弱体化と婚姻の自由の増大がそれを生んだという結論を導き出した。これは筆者の結論と大きく異なる。そこで本稿では、紙幅の関係から十分に議論できなかった前稿を補いつつ、1940年代にまで考察の範囲を広げ、改めてこの問題を論じることにした。

第Ⅰ章では清末民初の求婚広告をとりあげ、それがいかなる思想状況・時代背景のもとに登場したかを明らかにする。第Ⅱ章では1920年代の求婚広告と「社交公開」の議論との関係を探る。第Ⅲ章では1920年代の求婚広告の分析をし、求婚者像、および理想とする配偶者像を抽出する。以上の議論をふまえて第Ⅳ章では求婚広告と新しい婚姻観との関係を明らかにする。最後に第Ⅴ章で1940年の求婚広告をとりあげ、1920年代との比較を行うとともに求婚広告の社会的意義について考えてみたい。

本論に移る前に言葉の説明をしておこう。清末には「求婚」という語が用いられたが、1920年代の『申報』には「求婚」をタイトルに掲げる広告は11件しかなく、うち4件は1920～1922年に集中している。この時期に最も多いのは「徴婚」という語で、1922年10月以降、この呼称が徐々に定着していった。本稿では「求婚」という日本語を用いるが、原語では「徴婚」のことが多いということを断っておく。

I 清末民初の求婚広告

中国で最初の求婚広告は1902年6月26日に天津『大公報』に掲載された。同じ広告が7月27日の上海『中外日報』に「世界最文明之求婚広告」という題で掲載された⁽⁵⁾。広告主の「南清志士某君」は相手の女性に3つの条件を出した。一、天足であること。二、中国・

西洋の学術方法に通暁していること。三、婚姻の儀式はすべて文明の通例に照らして、中国旧有の陋俗をすべて廃すること。そして、これらの条件に合致し、結婚を希望し、かつ結婚に際して完全な自主権を持つ者は、満洲族・漢族、新式・旧式、貧富貴賤、年齢の上下、美醜にかかわらず、誰でもよい、と。

条件の最初に挙げられた「天足」とは纏足をしていないことである。当時盛んであった纏足解放運動に女性たちが抗した最大の理由は纏足をしないと結婚ができなくなるという恐れであった。梁啓超らが発起した不纏足会は結婚を保証することで女性たちに纏足を解くことを促進しようとした。不纏足会は天足女性の結婚紹介所として想定されていたともいえる⁽⁶⁾。この広告が梁啓超らいわゆる「変法派」の人士と深い関係にあることは他の点からも推察される。『中外日報』はかつて梁啓超が「纏足一日不変、則女学一日不立」と記し、纏足の廃止と女子教育の振興を主張した『時務報』の後継紙である⁽⁷⁾。さらに「南清志士」というペンネームや、結婚相手として満洲族でもよいと述べているなど⁽⁸⁾、変法派に共鳴する点が多い。ただ列挙された条件が抽象的なこと、自分自身について何も語らないことからして、そもそもこの広告が本当に結婚相手を探そうとして出されたものかは疑わしい。むしろ求婚広告という形式をとった一種の纏足反対論であったとみるべきであろう。求婚広告というアイデアが何処に由来するかは定かではないが、彼がYMCA（天津青年会）を連絡先の1つに挙げていることから、あるいは欧米のそうした風俗を耳にしていたのかもしれない⁽⁹⁾。

この破天荒な広告は女性界の反発を受ける。のちに著名な女権運動家となる林宗素は南清志士某君がみずからの姓名、素性、学業の程度も明らかにせず、相手にだけ厳しい要求をつきつけた点を批判した⁽¹⁰⁾。彼女にとって、中国・西洋の学問に通じた天足の女性がこのような呼びかけで集まってくると考えるのは、「文明女人」を奴隷あつかいしている証拠であり、この求婚広告は、女権を扶植するどころか、逆にそれを抑圧するものであった。林は求婚広告にひそむ男性中心主義を看破していたといえる。ただ南清志士某君のために弁護するならば、「門当戸対」（家柄の釣り合い）が重視された当時、天足と教育という女性本人の個人的資質を問題にした姿勢は、たしかに伝統的な婚姻観を打ち破るものであった⁽¹¹⁾。

1905年7月5日、日本留学生の王建善が『時報』に求婚広告を掲載した⁽¹²⁾。王によれば、西洋人は中国人の結婚を牛馬の配合のようにみなしており、これに対抗するために自由結婚の説が起こったが⁽¹³⁾、いまの中国でそれを実践すればかえって綱紀を乱すことになるから、まずは男女が互いに文通し、しかるのち婚約のことを相談すべきである、と。南清志士とちがって、王は姓名、住所ばかりでなく、日本の医学校に留学していること、結婚

を急いでいるわけではないが早めに相手を探しておきたいことなど自分自身の状況を詳しく説明し、逆に女性に対する条件は示さなかった。王の広告には確かに相手を探そうとする誠意が感じられる。王建善が求婚広告を出したことは日本の新聞でも報じられた。

金沢医学専門学校に在りて医学研究中なる清国留学生王建善なるもの、同地より上海なる上海時報に一片の広告を掲載し、四百余州の淑女に求婚したり。其広告文にハ言を極めて清国に於ける压制結婚の弊風を攻撃し、『中国人婚配如牛馬任人牽弄』などと飽迄ハイカラを振舞したるに、同新聞記者ハ之を評して曰く、清国にハ自ら清国の礼儀あり、牛馬の如しなど、ハ失敬千万なれども、文信広告を以て男女互に相求め、情緒を述べ、境遇を語るハ、西洋人の野合主義（自由結婚）の事と異なり、敢て風教を害するの虞なし。兎も角も我清国にてハ破天荒の新式結婚法なれば、喜んで之を世の紳士淑女に紹介す、云々と言へり⁽¹⁴⁾。〔句読点は引用者による。以下、同じ〕

同新聞記者云々の箇所は『時報』にはみえず、『読売新聞』記者の創作と考えられるが、自由結婚に対する否定的な見解は中国でも同様であり、たとえば清朝が1904年に発布した奏定蒙養院章程及家庭教育法章程では、西洋の書籍を多く読むことにより、外国の習俗を誤って学び、自分で結婚相手を決めたり、父母や夫を軽視するようになることへの危惧が表明されている。自分で相手を選ぶことでさえ非難の対象となっているのであるから、男女が直接会って交際することは論外であり、王建善の主張のなかでも交際的手段は文通に止まっている。そもそも男女の交際は当時の多くの日本人にとっても新しい考えであり、都市部の知識人層が「恋愛」や「男女交際」といった考えを受け入れるのはやっと1900年前後になってからである。丁酉倫理会の井上哲治郎が会長となって「男女交際会」を結成し、既婚男女の男女交際を実践したのはちょうどこの頃であった⁽¹⁵⁾。

日本で男女交際を論じた最初の知識人は福沢諭吉で、『男女交際論』（1886年刊）において文明の発達と男女交際を関係づけた⁽¹⁶⁾。福沢は男女の交際には「情感の交」と「肉体の交」があるという。従来男女の交際を「肉体の交」と同一視してきたがために「文明開進の歩」が遅れた。しかし文明の発達とともに「情感の交」はますます重要になり、男女交際によって「人々の一身一家又一国の幸を進め」ることができるのである。福沢はかつて『文明論之概略』（1875年刊）において、文明の進歩を「人間交際」が増大し複雑化する過程であるととらえた⁽¹⁷⁾。この「人間交際」論と「男女同権」論が結びあったところに「男女交際」論が生まれたといってよからう。こうした理論化によってはじめて男女交際は議論の対象となりえたのである。福沢は『男女交際余論』で次のように言う。

古来男尊女卑の習慣を成したる我国柄にして、自然に女子の教育も怠りたることあれば、今日俄に之を学問の道に導き、其所得の学芸を以て男子と交際を開かんとするは容易なる事にあらず……。

つまり当時の「男女交際」論が想定していた女性とは、丁酉倫理会の女性会員のように教養のある女性（しかも既婚）であり、交際とは具体的には文芸の交換であった。今日的な意味での男女交際とはまだずいぶん隔たりがあるし、そこに恋愛が介在する余地もなかった。清末の中国でも、男女の「交渉」は一国の教育、そして文明の程度と関連付けられ、恋愛は重要な要素ではなかった⁽¹⁸⁾。王建善は自由結婚の価値を認めつつも、未婚の男女が直接交際することについては否定的である。

その後、求婚広告はどうなったのか。趙良坤の調査によれば、『大公報』に次の求婚広告が掲載されるのは1928年のことである⁽¹⁹⁾。『申報』では遅くとも1920年には求婚広告が掲載されはじめる⁽²⁰⁾。この間の情報は極めて乏しいが、いくつかの事例を紹介しよう。

1917年6月18日の『晨鐘報』によれば、山東省のある新聞に、「北京高等女学校」を卒業した17歳の女性が「招親広告」を出した。「年齢がふさわしく、よい家柄で、妻妾を娶りたい方」に対して面談に応じるという内容のものであるが、これを紹介した『晨鐘報』の編者は、「社会の気風が昔とは違ってしまい、廉恥の道が喪われ、この奇奇怪怪な出来事を演じた。まったく想像もつかないことである」と、風俗の乱れとして受け止めた⁽²¹⁾。

1918年11月17日の『時報』に、周という女性が、門前に「招夫広告」を掲げたという記事が掲載された。広告の内容は、「女学士周□□、現在28歳、原籍は広東省香山県、久しく北京に寓居し、アメリカの女子大学を卒業し、いま北京の某女学校で教鞭をとっています。家の資産・不動産は5万元に達します。広告を掲げた日から民国8（1919）年1月までに、学士のかたで□□（女性の名）と同等の能力と資産をお持ちの方は、毎日午後4時から6時を面会時間にしますので、どうか時間にあわせてお越しください」というものである。彼女は両親に無断でおこなったため、これを知った父が激怒し、広告を掲げ続けることができなくなったという。『時報』の記者は彼女のことを「西洋の風習に染まっている」と指摘したが、求婚広告は依然として外国の奇異な風習と意識され、清末の求婚広告に続くものはほとんどなかった。求婚広告が再び登場するのは1920年代である。次章ではまず求婚広告と関係が深いと考えられていた「社交公開」の議論を検討し、両者の関係を再考する。

Ⅱ 1920年代の求婚広告

1 「社交公開」の議論と実践

五四新文化運動は従来の封建的諸制度に対する批判を基軸として展開されたが、それを主導した男性知識人たちが最も切実に感じ、そして実際に多く論じられたのは、婚姻や家庭の問題であった。林賢治がいみじくも「集団出奔事件」と言い表したように⁽²²⁾、五四運動は個人のレベルにおいては、封建的諸制度の牙城である旧式家庭からの脱走とも言い換えられるものであった。そのきっかけとなったのは、多くの場合、親の取り決めた結婚であった。自由恋愛、自由結婚を標榜した五四の青年たちは、親が押しつけた旧式の女性に満足できなかった。とはいえ当時の中国社会において男女間の障壁は依然として高く、自由な交際が許されていなかったため、ふさわしい交際相手を見つけるのは容易ではなかった。そこで提唱されたのが、男女の「社交公開」である。

1916年に陳独秀は「孔子之道与現代生活」において、「男女は雑坐せず」「嫂叔は通問せず」に象徴されるような儒教社会における男女の隔離を批判し、男女交際が当然のこととされている欧米の文明社会と対比させた⁽²³⁾。一方で、男女の自由な交際は現在の欧米ではなく過去の中国の理想的な状態への回帰という形で語られた。清華学校の学生楊潮声〔楊潮〕は、「礼教ができてから、男女の境界がうまれ、礼法ができた。男女の交際は秘密となり、姦淫、貞操、節操などの問題が生じるようになった」と述べ、人為的な礼法を廃し、礼教以前の自然な状態への回帰を唱えた⁽²⁴⁾。また李漢俊は私有制の廃絶と原始共産時代への回帰を説いた⁽²⁵⁾。

「社交公開」にはたえず乱交や道徳の墮落だとする批判が伴った。そこで「社交公開」の推進者たちはそれを結婚や恋愛と結びつけることには慎重であった。たとえば張東蓀は青年たちに配偶者探しを考えて社交に入ってはならないと忠告している⁽²⁶⁾。しかし逆にこのことは、「社交公開」が往々にして自由恋愛の場と考えられていたことを示す。1928年になっても樂瑤女士は、社交は恋愛の道具で未婚者に配偶者を選ぶ機会を与えるものであると主張している⁽²⁷⁾。また1929年に岱青は「男女社交公開が騒がれて十数年がたち、最近ではすっかり過去の言葉となってしまった」が、その実践者の大半が社交は恋愛であり、男女交際は結婚問題の解決であるという誤った考えを持っていると批判していた⁽²⁸⁾。

「社交公開」の推進者たちは、「日々男女社交公開を叫びながら、娯楽場、茶館、酒店などを公開の場所とし、「配偶者探し」の眼鏡をかけて女子との社交を公開する」連中を自分たちとは区別しようとした⁽²⁹⁾。彼らは社交を男と女の交際ではなく、人と人との交際として位置づけようとした⁽³⁰⁾。そのためにはまず女性を「人」にしなければならない。

張東蓀は「社交公開は女子が社会的地位を獲得する第一歩である⁽³¹⁾」と論じ、李漢俊はマルクス主義の立場から「女性には深閨に閉じ込められた女性と娼婦しかおらず、両者とも節操を売ること生活している。もし女性が職業を得て経済的に独立できれば、性の桎梏から解き放たれ、男性と対等につきあうことができる」と論じた⁽³²⁾。このように社交公開は女性解放と不可分のものとみなされた。だから、女性解放とは「社交公開」を要求することだと多くの人が勘違いしたのである⁽³³⁾。

しかし、「社交公開」は決して男女が対等に交際する場ではなかった。男性は女性に「人」となることを求めたが、それは女性を男性化することにほかならなかった。男性は女性の導き手として、一貫して指導的立場に身を置いた。江亢虎によれば、女性は学問、知識、経験が十分ではないため、男性がすこしでも悪い考えを起こせば、往々にして騙されてしまう⁽³⁴⁾。社交公開は女性解放の仮面をかぶりながら、実際には女性を「時代の犠牲品」にしたのである。「社交公開」には抑圧的な側面も存在したが、当時の文脈からすれば十分に革新的であり、それゆえその是非について多くの議論がなされたのである。

では、五四時期に「社交公開」はいったいどれくらい実践されていたのだろうか。1929年の女子学生に対する調査では、「伴侶を選択するいい機会」「男女平等の表現」「お互いを正しく理解する機会であるが、婚姻を前提とする必要はない」「婚姻の第一歩」「中国では時期尚早」「容易に青少年が道を踏み外す」など様々な意見が出たが、9割が賛成であった⁽³⁵⁾。1923年のある調査で、自分で結婚を決めるならどのような方法をとるかという質問に対して、「社交公開」を挙げた男性は34%、自由恋愛を挙げた男性は15%にのぼった⁽³⁶⁾。1929年の別の調査では、同じ質問に対して、「社交公開」が53.4%、自由恋愛が21.6%であった⁽³⁷⁾。これらの数字に明らかなように、「社交公開」に対する理解は徐々に深まり、それを実践したいと願う青年は増えていた。それは政治的スローガンにも取り込まれ、1927年5月に上海学生連合会は「男女学生の通信、社交、婚姻の自由」をその要求の1つにとりあげさえした⁽³⁸⁾。

しかし学生団体がこのような要求を掲げねばならなかったことが示唆するように、現実には理想とはかけ離れていた。1921年の調査で、既婚の男子学生184名のうち、本人が結婚を決めた者はわずか6名しかいなかった。本人の同意なく父母や親戚が決めた者は172名であり、そのうち8割は婚前に妻と面識がなかったという。対照的に、未婚者259名のうち本人で結婚を決めたいと答えた者は171名（66%）にのぼった⁽³⁹⁾。1930年の調査では、36名の既婚男性のうち、本人が決めたという事例はなく、親が決めた者が70.6%、親が決めて自分が同意した者が17.6%、本人が選んで親が同意した者が11.8%となっている。この結果に対して調査者は、「中国では婚姻自由や自由恋愛が叫ばれて久しいが、現在の一

般の大学生の婚姻は依然として親が取り決めており、本人が独立して選択したものは一人としていない。まことに奇怪だ」と驚きを隠さない⁽⁴⁰⁾。多くの青年は結婚を決める過程に関わりたと考えており、その手段として「社交公開」を挙げたが、実際には結婚は家庭によって決められることが多かったのである。

そもそも社交の場は万民に開かれたものではなかった。仲軒なる人物は社交の資格として、良好な教育を受けていること、高深な学識を具えていること、どんな誘いにも惑われない断固たる意志を有すること、男女平等の真諦を理解していることなどを挙げた⁽⁴¹⁾。この条件をクリアできる男性はさほど多くはなかっただろうが、女性となるとさらに少なかった。ある男性は『婦女雑誌』の編者に向かって「率直にいうと、「恋愛結婚」はいくつかの学校の中の新人物だけが実行できるにすぎない」と述べたが⁽⁴²⁾、その学校でさえ実情は理想からほど遠い状態にあったのである。したがって、「この時代にあって、知識が同等で職業を有し独立しているのでなければ配偶者ではないというような、あまりに高い理想を抱くのなら、いっそ早いうちに独身の準備をしたほうがよい」というのは適切なアドバイスであったといえる⁽⁴³⁾。

2 求婚広告の是非

求婚広告という新しい結婚方法の登場は当時の人々にどのように受け取られたのだろうか。1923年に「徴婚と自由恋愛」という文章が発表された⁽⁴⁴⁾。著者は自由結婚の支持者であるが、求婚広告には反対だった。彼は求婚広告を愛情なき結婚とみなし、いまや社交が頻繁になり恋愛の機会も多いのに、どうして求婚広告を出す必要があるだろうかと疑問を投げかけた。しかし、「社交公開」が現状では十分でないことは求婚広告に反対する人々でさえ痛感していたから、社交が開かれているので求婚広告は不要だという議論はいささかの外れといわざるを得ない。

1924年に『婦女雑誌』は「広告を用いて求婚することの可否」というタイトルの紙上討論会を企画した。14名の意見が掲載され、賛成派は6名、反対派は8名であった。賛成派の意見はおおむね次のとおりである。結婚は自由恋愛を基礎とするが、社交が十分に公開されていない中国の現状では、満足のいく結婚をすることは難しい。求婚広告を用いれば、選択肢が広がり、時間も節約でき、公明正大である。たしかに広告の信憑性は問題になるが、それは道德の問題で求婚広告自体の問題ではない、と。一方、反対派は、求婚広告に恋愛はないと断定する。不誠実な条件の応答で暫時の合意を得ても、長続きするはずはなく、必ず破綻をきたす。結婚前に交際して相手を観察できるといっても、結婚を念頭につきあってはきちんとした判断はできない。求婚広告は売買に等しく、旧式結婚と

変わりはない。むしろ社交公開を促進するべきである、と。最後に記者（章錫琛）は次のような意見を付した。恋愛と結婚は不可分のものであり、結婚のために恋愛を求めるのは間違っている。恋愛は自然のめぐり合わせであり、無理に求めるものではない。賛成派は社交の未公開を理由に挙げて、求婚広告を便宜的方法とみなすが、ならば旧式の結婚も便宜的方法とみなせるではないか、と⁽⁴⁵⁾。これにより、『婦女雑誌』としては求婚広告に反対という立場が示された。

賛否両派は、恋愛を結婚の基礎に置く点で共通するが、求婚広告に恋愛を認めるか否かで意見が分岐した。賛成派は旧式の売買結婚は受動的、強制的で恋愛が存在する余地はないが、求婚広告は能動的で自由であり恋愛があるとみる。求婚広告はあくまで道具であって、選択権は求婚者自身にあるのだから、それを適切に用いれば恋愛は得られるはずであった。一方、反対派は求婚広告を一つの婚姻制度とみなし、自由結婚＝自由恋愛とは相容れないとする。旧式結婚も求婚広告も媒介を用いる点で変わりはなく、その意味で求婚広告は旧式結婚の変形にすぎないとする。なぜこのような理解の違いが生まれたのか。

デビッド・ノッターは日本近代の「男女交際」には3つの意味があり、①福澤のいうような「社交」としての「男女交際」（social intercourse）、②配偶者選択過程における婚前の男女の付き合いである「男女交際」（courtship）、③配偶者選択過程とは必ずしも直接的に関係を持たない男女の社会的接触としての「男女交際」（integration of the sexes）であったとする⁽⁴⁶⁾。ノッターは日本において「恋愛結婚」とは実質的には「友愛結婚」であり、男女交際への社会的寛容度が低い日本で「恋愛結婚」と「男女交際」が共存できたのは、「男女交際」という言葉の持つ曖昧さ・多元性によるという興味深い議論を展開している⁽⁴⁷⁾。中国の「社交公開」という言葉にも同じような傾向が見られる。求婚広告賛成派のいう「社交」とは②のことであり、まずは結婚という目的があり、求婚広告はそれを達成するための手段としてとらえられた。反対派のいう「社交」とは①に近いものであり、本来結婚とは必ずしも結びつくものではない。にもかかわらず反対派は「社交」と結婚を結びつけ、その基礎に恋愛がなければならぬと考えたのである。つまり彼らは「社交」自体を論じるときは①の意味で、求婚広告を批判する際には②の意味で「社交」を用いているのである。賛成派は②の意味で「社交」をとらえたから、両者の主張はかみ合うはずはなかったのである。

なぜ反対派はことさらタテマエ論を展開したのだろうか。当時、自由恋愛や「社交」という概念は青年知識人の世界でこそ定着していたが、現実の社会で広く受け入れられていたわけではなかった。自由恋愛や「社交」を認知してもらうには、正しい理念を訴えてその正当性を示す必要があった。求婚広告という現実的「手段」は彼らにとって逸脱・墮落

であり、ひいては自由恋愛や「社交」に対する社会的否認をもたらしかねないものだったのである。

3 初期の求婚広告

1920年8月11日の『申報』に掲載された張枕緑「求婚雑話（一）」は「わが国ではここ数年来、新聞に広告を出して求婚することがたびたび見られ珍しくない」と記す。「数年来」というのはやや大げさな表現と思われるが、実際にこの年5月の『申報』に求婚広告が掲載され、8月には2日～7日と9日に求婚広告が掲載されていた⁽⁴⁸⁾。1920年5月24日に掲載された求婚広告は次のようなものである。

友人の黄君は、年齢が23歳、家の資産は百万で、幼くして父を喪い、日本に転居しました。いま帝国大学政治経済科に在学しています。人となりは純良で、救国の願いを抱いており、わが国の人が模範とするに足ります。来年卒業後、アメリカの大学へいって研究を続け、学業が成就すれば、上海に戻って居を定めるつもりです。いま東京で自ら購入した家が大きすぎ妻もいないので、使用人を雇って家事の管理をしていますが、これは宜しと思つてのことではありません。そこで特に〔黄君に〕代わって『申報』に〔広告を〕掲載し、謹んで国内の賢明なる女性に告げ、これによって新しい理想の賢妻を得ることができればというのが、実に黄君の願うところであります。もし下記の各項目に同意していただければ、すみやかに自筆で履歴と条件をお示しいただき、最近の写真とあわせて、「東京市芝区田町八丁目一番地黄公館内王某収」までお送りください。合格しましたら、ただちに黄君の写真を持たせて人を派遣し、互いに相談します。こうしたやり方は、まことに現代文明に適合した方法であり、わが国の人もまた怪しむことはないでしょう。一、学力は中等程度で英語が少しわかる方。二、品性は純良でなければならず、新思想を具え、愛国心に富む方。三、身体は健康で精神は活発でなければならず、太りすぎもやせ過ぎも不合格である。四、容貌は美しくなければならず、よい家柄の方。五、年齢は十七歳以上二十歳以下で、かならず正直に教えてください。段取りが決まれば、東京へ留学しに来てかまいません。女性側の家の貧富に関係なく、一切の費用はすべて男性側の家が負担します。よい日取りを選んで、婚礼をおこないます。もし女性側の家が貧しく、また老人を養うために適当な財物で報いられることを望むのであれば、どうすべきかすみやかに直接相談して誤解が生じないようにしていただければ幸いです。

中国国内ではまだ求婚広告が普及しておらず、だからこそ黄君は段取りを事細かに説明して理解を求めなければならなかった。広告のタイトル「謹告希望文明結婚の女士」が端的に示すように、彼はこの挙を文明的ととらえていた⁽⁴⁹⁾。黄君は新思想の持ち主であり、相手にも新思想を求めていたとはいえ、2人が会うのは婚約後と想定されており、結婚を前提とした交際は「社交公開」の趣旨とは合致しない。『申報』最初の求婚広告は、日本でふさわしい相手を見つけることができず、しかも紹介の労をとってくれる友人にも欠いていた黄君が、日本の「文明的」やり方にならって敢行したものであって⁽⁵⁰⁾、本国における「社交公開」や自由恋愛の議論とはあまり関係のないところで発生したといえる。

求婚広告が「社交公開」と結びつけられるようになる1923年以前の求婚広告をみると、求婚広告を出した主たる原因は異郷にいて結婚相手を探す機会に恵まれないことにあったのではないと思われる。1920年から1923年の求婚広告は重複をのぞいて14件あるが⁽⁵¹⁾、このうち海外にいる中国人の求婚広告が3件、上海にいる外国人の求婚広告が2件あり、これは1920年代全体からみて非常に高い比率だからである。初期の広告主の学歴は高いが、必ずしも新しい思想をもつものが多かったわけではない。ある家長が出した広告は、双方の両親が交際したあと結婚を決めるとしており、本人の出る幕はないようである。またある広告が募集したのは、妻ではなく妾であった。

求婚広告を「社交公開」や自由恋愛と結びつける議論はあとから求婚広告を正当化するためになされたものであって、「社交公開」や自由恋愛の議論が求婚広告を生んだわけではないのである。ただそうした議論は求婚広告の敷居を低くし、その普及を促進したといえるであろう。

Ⅲ 求婚広告の分析

本章で分析する資料は、1920～1929年の『申報』に掲載された全ての求婚広告である。『申報』では1920年5月24日に最初の広告が掲載されて以降、1929年12月31日に至るまで、のべ476件、重複をのぞくと、165件の求婚広告が出された。うち、宣伝広告4件（後述）を除く161件が本章の分析の対象となる⁽⁵²⁾。男性は131名（1件の広告で兄弟2名分の相手を募集するものがある）、女性は32名（1件の広告で兄・妹2名分の相手を募集するものがある）で、男女比は4.09：1である⁽⁵³⁾。この163名のデータには男性5名、女性2名の外国人が含まれている。さらに「徵求父母或入贅」のように、養子でも入り婿でもよいというケースも分析対象に含めている。理由は後述する。入贅可の広告は全部で7件、うち2件は同一人によるものである。

求婚広告の字数は27字から477字まであり、平均して98字である⁽⁵⁴⁾。掲載回数はもっとも多いのが10回で1件、8回が4件、7回が10件あり、平均すると1件あたり約3回掲載され、1回きりのものが47件ある。

女性による最初の求婚広告は1924年に登場した。女性の求婚広告は家族や友人の紹介という形をとることが多いが、紹介者はみな男性である。男性が女性の相手を探すというのが求婚広告の主たる構図であり、逆の場合でも男性が何らかの形で関わるが多く、女性が前面にでることはほとんどなかった。

次節以下では、自己紹介と相手の条件とのそれぞれについて、年齢、学歴、職業などの項目に分類し、当時の社会調査と比較しつつ、求婚広告の内容を分析する。

1 求婚者による自己紹介

表1は男女別に各項目への言及率をまとめたものである⁽⁵⁵⁾。以下、各項目について分析を加える。男性では職業が最も多く言及され、ついで学歴、年齢、品格、性情の順になる。一方、女性の場合は、年齢がトップで、学歴、容貌、性情、家柄と続く⁽⁵⁶⁾。両性に共通するのは年齢と学歴への言及率の高さである。男性の特徴は、職業、財産、収入など自己の経済状況を示す項目への言及が多いことであり、女性の特徴は容貌、性情など生理的条件と、家柄、家事など「家」に関わる項目への言及が多いことである。各項目への言及率は男性では職業と学歴、女性では年齢と学歴が6割を超え、男性の年齢が4割を超える以

表1 自己紹介における各項目への言及率（1920年代）

男性		女性	
項目	言及率（％）	項目	言及率（％）
職業	68.7	年齢	84.4
学歴	62.6	学歴	65.6
年齢	45.8	容貌	28.1
品格	26.0	性情	25.0
性情	24.4	家柄	25.0
財産	11.5	職業	18.8
籍貫	9.2	家事	18.8
収入	8.4	技芸	15.6
容貌	6.9	品格	12.5
家柄	6.1	籍貫	6.3

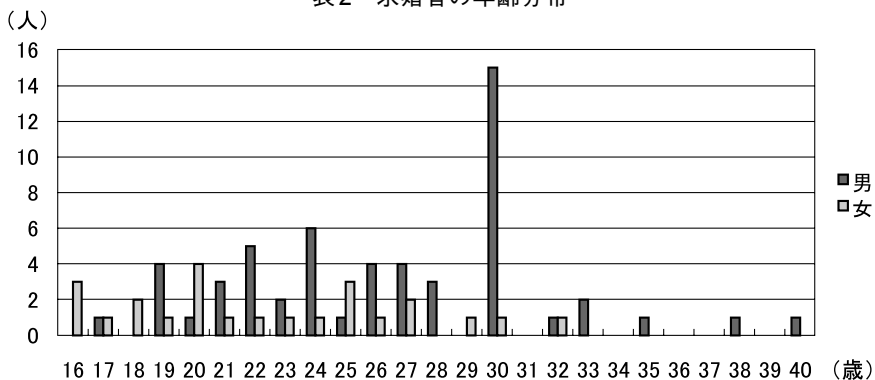
外はすべて3割に満たない。この言及率の低さは1980年代以降の求婚広告と比べると1920年代の際だった特徴といえることができる。1985年を例に挙げると、男性は年齢と身長が100%、健康が87.3%、職業が80.2%、学歴が73.3%、女性は年齢が100%、身長が93.9%、学歴が87.9%、職業と容貌が78.8%であった⁽⁵⁷⁾。こうした違いの原因の一つとして、1920年代にはまだ求婚広告の様式が確立していなかった（つまり当然記すべき項目についての合意が形成されていなかった）ことが考えられる。1940年になると、年齢に関しては男性が8割をこえ、女性は9割に達し、男性の職業と女性の学歴がそれぞれ7割を越えるようになる。

（1）年齢

年齢に言及した求婚者は全部で87名、うち男性が60名（45.8%）、女性が27名（84.4%）である。「年輕」「逾花信」など曖昧な例を除いて統計をとると、男性の最年少は17歳、最年長は40歳で平均年齢は26.5歳、女性は16歳から32歳までで平均年齢は22.3歳である。年齢層の分布は表2で示した。男性は全体的に女性よりも年齢層が高く、30代の男性が21名もいるのに対して、女性はわずか2名しかいない。38歳と40歳の男性、および32歳の女性は再婚であり、初婚者に限れば女性はすべて30歳以下で、男性も30代後半はほとんどいない。これとは対照的に、1980年代以降の場合、求婚者の平均年齢は30歳を越え、サンプルによっては男女とも平均年齢が30代後半にずれこむこともある。

参考までに当時の結婚適齢期をみておこう。麦恵庭は、法定の最低年齢は男性が18歳、女性が16歳であるが、適齢は男性が25歳、女性が22歳であるとしている⁽⁵⁸⁾。求婚者の平均年齢はまさしくこの数字に一致するが、実は適齢とその前後2歳に相当する者は男女とも全体の1/3に過ぎない。なお適齢期以前の求婚広告は男女を問わずほとんどすべて親や兄弟が掲載したものである。

表2 求婚者の年齢分布



(2) 学歴

具体的に学歴を記したものは男性57名(43.5%)、女性10名(31.3%)である。表1の数字はこれに「品学俱優」「通中西文」などの曖昧な記述、および職業(医師、学校教員)からなんらかの教育を受けたと推察されるもの(男性25名、女性11名)を加えた数字である。男女別に詳細をみていこう。男性は大学の在籍・卒業者が33名、海外留学経験者が8名、高等教育を受けたとする者が2名、これに専門学校卒業の2名を加えると、高等教育を受けた男性は42名であり、男性全体の33.1%に達する⁽⁵⁹⁾。次に多いのが中学卒業で、11名いる。学歴として小学を挙げるものは1人もいない。これは最終学歴が小学であるものがないというのではなく、小学卒業程度であれば書かないほうがよいとの判断があったと考えられる。女性は大学が1名、中学が5名、医学校1名などとなっている。当時の社会一般の水準からすれば、求婚者の学歴はきわめて高い。

(3) 職業

職業を記した者は97名おり、うち男性90名(68.7%)、女性7名(18.8%)で、男女差の大きい項目である。男性では商業が最も多く、教育、政府機関、会社など、いわゆる第三次産業に分類されるものばかりである。上海の労働者で最大の比率を占める工場労働者は全く見られない⁽⁶⁰⁾。また年齢構成から予想されることではあるが、学生は意外に少ない。女性で職業に言及したのは6名で、内訳は教育が5名、医師1名、いずれも「高尚」な職業である⁽⁶¹⁾。言及率はさほど高くないが、21歳以上の女性に限定すれば、16名中6名、言及率に換算すると37.5%となり有職率は高い。

(4) 収入

収入は職業とならんで男女差が大きい項目である。女性で言及したものはなく、男性は11名(8.4%)である。最低は月100元、最高は月1000元で、100～300元が多い。1920年代の上海では、5人家族の場合、月200元以上が上等、100～200元が中等、一般市民は66元程度で、30元以下は貧民の下等生活であったという⁽⁶²⁾。100～300元という収入は、妻が働かなくとも、中・上等の生活が保障されるというメッセージである。

(5) 出身・居住地

求婚者の出身、居住地については、籍貫と連絡先からある程度知ることができる。外国人9名を除いた合計23名のうち、江蘇・上海が12名、浙江が6名、江西と広東が各2名、安徽、北京が各1名となっている。江蘇、浙江両省で全体の4分の3以上を占めている。連絡先の住所は『申報』館を挙げるものが多く、上海以外では浙江省の義烏県と杭州、江蘇省の宝山区、山東省の陽穀県、日本の東京(2名)、フランスのセーヌ県の7名で、その多くが初期に集中している。『申報』館を連絡先としたものが上海に居住していると仮定

すると、95%以上の求婚者（もしくはその代理人）が上海に居住していたことになる。

求婚者の平均像は、男女いずれも上海在住で、学歴が高く、男性は20代後半から30代前半のホワイトカラー、女性は20代ということになる。学生はわずか6名（4.6%）しかいなかった。求婚広告で披露された自画像は、その情報が正しいものであったとしても、求婚者の実像ではない。求婚者の自己紹介は選択的かつ戦略的であり、不利な情報を載せるようなことはほとんどない。経済力がない者は才能や容貌を強調するだろうし、学歴のない者は家柄や品行を強調するかもしれない。

『大公報』の男性求婚者を分析した趙良坤は、彼らがおおむね社会の中上層に属すると結論し、その原因として、彼らが結婚市場で有利な条件、すなわち「資本」を有していたことと、彼らが社会公共領域の参与者であったことを挙げた⁽⁶³⁾。ただし、『大公報』でも『申報』でも約4割の男性が学歴に、約3割の男性が職業に言及していないことは留意する必要があるだろう。

2 求婚相手の条件

次に相手に対する条件を検討し、求婚者の配偶者観をうかがってみよう。表3によれば、男性が挙げた条件で最も多いのは学歴、ついで年齢、品格、家柄、性情であった。一方、女性が挙げた条件で最も多いのは、職業、年齢、品格、学歴、財産であった⁽⁶⁴⁾。なお条件の数は平均して2.8項目であり、最も多いものは6項目にわたる条件を提出している。

表3 求婚相手に対する条件の言及率（1920年代）

男		女	
項目	言及率（%）	項目	言及率（%）
学歴	51.1	職業	62.5
年齢	39.7	年齢	50.0
品格	37.4	品格	34.4
家柄	30.5	学歴	31.3
性情	26.0	財産	31.3
思想・意志	15.3	家柄	18.8
容貌	14.5	性情	15.6
言語	8.4	健康	12.5
籍貫	7.6	籍貫	9.4
職業	6.1	家庭状況	6.3

表4 当時の社会調査における求婚相手への条件

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	出典
男性	性情	健康	教育造詣	治家能力	相貌体態	性道德	家世清白	経済能力	母性	粧奩	A
	性情	身体	品行	品貌	学問	才能	年齢	家世	交際		B
	性情	健康	相貌体態	教育造詣	治家能力	性道德	母儀	経済能力	家世清白	粧奩	C
女性	性情	学問	身体	才識	年齢	相貌体態	家世				D
	性情	健康	辦事能力	教育造詣	性道德	相貌体態	経済能力	家世清白	父性	家産	A
	性情	健康	教育造詣	辦事能力	性道德	経済能力	相貌体態	家世清白	父道	家産	C

(出典) A：潘光旦『中国之家庭問題』、B：葛家棟「燕大男生對於婚姻態度之調査」、C：周叔昭「家庭問題的調査」、D：梁誠生「燕京大学60女生之婚姻調査」 以上、いずれも『民国時期社会調査叢編』所収。

次に、これを当時の社会調査のデータと比較してみよう(表4)⁽⁶⁵⁾。性情と健康に対する両者の意識の違いが顕著である。表4では男女を問わず、性情と健康が非常に重視されているのに対して、表3にみえる言及率はさほど高くない。表4では表3の職業、家柄、財産に当たる項目(経済能力、家世清白、粧奩)が男女とも軒並み下位になっている。これは表4が相手の経済条件に対する軽視を、逆に言うと、求婚広告において相手の経済条件が非常に重視されていたことを示している。表4の主たる対象は学生であり、彼らは往々にして結婚を理想化した。前節でみたように、求婚広告に参加したのは学生以外の人々が主であったから、この違いが配偶者観の違いの一因であろう。

男性の自己紹介と女性への要求、女性の自己紹介と男性への要求を重ね合わせてみると、男女それぞれの思惑の違いが浮き彫りになる。まず女性の自己紹介と男性の条件を比較してみると、家柄と性情はほぼ対応しているものの、女性は自己の学歴、年齢、容貌、職業をより意識している。言葉を換えれば、これらの項目については女性が意識するほど男性は意識していない。次に女性の条件と男性の紹介を比較してみると、職業、年齢はほぼ対応しているが、男性は自己の学歴、性情をより意識し、女性は男性の財産、家柄、健康をより意識していることがわかる。ただここで注意しておかねばならないのは、女性の広告の多くは家族・親戚もしくは(彼らの)友人が出したものであることである。その場合、女性本人よりはむしろ家の意向を反映しており、このことが求婚広告における経済条件の重視に結びつくと考えられる⁽⁶⁶⁾。

(1) 性情

性情に言及した男性は34名(26%)、女性は5名(15.6%)である。男性が女性に要求する性情は、温和、溫柔、温良、儉朴、勤儉、情愛に富む、淑貞、純厚、愛情専一、和好、活発、幽嫺貞静、真摯などがあり、うち24名は「温」の字を伴う語を用いている。女性

が挙げる性情も、温和、溫柔、温良、温儉といずれも「温」を伴う。「温」は男女双方にとって好ましい性格であったといえる。陳鶴琴の調査では、性情を挙げた男性のなかで温和が86.8%と最も多く、活発4.3%、忍耐2.7%を大きく引き離している⁽⁶⁷⁾。

一方、表4ではいずれも性情が一番に挙げられている。求婚広告にも「自由結婚は性情が投合することを貴ぶ」等の文言はあるが、さほど重視されているようには見受けられない。潘光旦は性情重視について次のように述べている。「性情を第一とするものは、個人主義の臭気に深く染まっているに違いない。個人主義者が結婚を重んじるのは、ロマン的生活を重んじるからである。そしてロマン的生活の第一の条件は、夫婦の性情が投合することである⁽⁶⁸⁾」。求婚広告を出した人たちは現実的志向の人が多かったのかもしれないし、性情は抽象的すぎて求婚広告で挙げる条件として適していなかったのかもしれない⁽⁶⁹⁾。

（2）学歴

68名（51.1%）の男性が学歴を条件に挙げた⁽⁷⁰⁾。その内訳は、初等教育11名、中等教育15名、高等教育2名である⁽⁷¹⁾。「いま女性界ではひとつの普遍的な現象が見られる。高等小学の卒業生が嫁ぐ男性は必ず中学の卒業生でなければならず、中学の卒業生が嫁ぐ男性は必ず大学の卒業生でなければならない」という言葉に見えるように、男性が自分より低い学歴の女性を結婚相手に求めるのが当時の一般的風潮であった⁽⁷²⁾。求婚広告にもこの傾向は看取される。たとえば、初等教育を挙げた11名の男性の学歴は、欧米留学生2名、大学卒業2名、中学卒業1名、ほか不明、である。『婚姻指南』によれば、妻に学問があると、視野が広いため養うのが難しいが、程度がやや低ければ、妻は夫のことを聞き、家事もやりやすくなるという⁽⁷³⁾。こうした男性の態度に対して敏感に反応した女性もいた。林珍は「もし男性の学問が私よりも高かったら、大いに傲慢になり、私は彼の奴隷、彼の学生にならねばならず、どこに研究する余地があろう」と述べた⁽⁷⁴⁾。妻との関係を弟子や助手との関係になぞらえる男性は多く、求婚広告のなかにもしばしば見える⁽⁷⁵⁾。

清末に女子教育が提唱されるようになって以来、「女子無才便是徳」という価値観が公然と称揚されることはなくなり、かわって教育がよき伴侶としての条件となりつつあった。陳鶴琴の調査では、女性に対して中学以上の教育を求める男性が6割近くに達した⁽⁷⁶⁾。樓兆植の調査でも76%の男性が相手に中学程度の教育を求めている⁽⁷⁷⁾。しかし同じ調査で既婚の男子学生の妻の教育程度を調べたところ、中学程度は16.9%にすぎず、小学程度が28.2%、教育を受けたことがないものも32.3%にのぼった⁽⁷⁸⁾。6～8割の男性が中学以上の女性を望んではいたが、現実的には既婚の男子大学生の妻のうち、中学以上の教育を受けたものは2割に満たなかったのである。

1920年代になっても中学レベルの教育を受けた女性は社会全体からみればまだまだ少

なく、女子学生は結婚市場において高い価値を有した。それゆえ、よい結婚をするために学校へ行くという現象が起こった。これに対して、卒業証書は女子学生の箔付けになっているとか、女子学生は学校を化粧品とみなしているなど様々な批判がなされた⁽⁷⁹⁾。しかしながら女性の教育が結婚生活で果たす役割はきわめて大きかった。陳鶴琴の調査では、結婚に不満な点の第1位は知識の欠乏であり、58%の男性がこれを挙げた⁽⁸⁰⁾。甘南引の調査でも学識がないことが妻に対する不満の第1位となっている⁽⁸¹⁾。それゆえ陳鶴琴は女子教育と家庭の幸福には密接な関係があると述べて、女子教育の必要性を説いたのである⁽⁸²⁾。

女性で男性の学歴を挙げたのは11名(31.3%)で、うち2名は欧米留学という高い条件を提示している(本人の学歴は滬西女塾と中学卒業)。学歴を挙げた女性11名のうち6名は職業を条件に挙げ、学歴を条件に挙げなかった女性は全員職業もしくは財産を条件として挙げている。学歴は男性の知的能力を測る基準というよりはむしろ経済力の指標であったと考えられる。

(3) 年齢

年齢を挙げた男性は52名(39.7%)いる。相手に求める年齢は15歳から40歳までと幅広い。本人の年齢と相手の年齢条件とを比較してみると、おおむね自分の年齢と同じか、それより年下の女性を望んでいることがわかる。自分より年上を条件に挙げるのは、妻に先立たれた38歳の男性1人だけである。年上でも可という男性は5名いる。自分の年齢より大幅に上の年齢まで許容する男性は、自分自身の条件がそれほどよくないとみてよい。女性のうち年齢を条件に挙げたのは16名(50%)いる。本人の年齢と相手の年齢条件を比較してみると、年下の男性を望む女性はまったくおらず、同年齢を条件にする女性も少ない。

以上は、当たり前すぎる結論のように思われるかもしれないが、当時の結婚の実態からすれば必ずしも「常識」だったわけではない。たとえば甘南引の調査によれば、妻が年上のものは43%、同年齢18%、年下33%となっている。妻が年上の夫婦のうち3歳以上の差があるものが27.9%を占めた⁽⁸³⁾。年下の妻は決して「当然」ではなかったのであり、女性のほうが発育が早いなどという生理学的根拠を挙げて正当化されねばならなかったのである⁽⁸⁴⁾。

(4) 家柄

家柄を挙げたのは男性40名(30.5%)、女性6名(18.8%)であり、とくに男性にとって女性の家柄は重要な関心事であった⁽⁸⁵⁾。家柄は旧式結婚において最も重視された条件の一つであるが、求婚広告では家柄に汚点がないこと(清白)を求めるものがほとんどで、

必ずしも「門当戸対」を望んでいたわけではない。陳鶴琴の調査によれば、家柄について清白32.7%、不問30.1%、読書人の家柄9.3%、遺伝上悪影響のないもの3.75%、中等階級3.75%となっている⁽⁸⁶⁾。遺伝が挙げられるのは一見奇妙に感じられるが、当時は優生学の観点から、遺伝が結婚に及ぼす影響が指摘されていた。潘光旦は相手を選ぶ条件として、家世清白を第一に挙げているが、それは先祖に悪疾、癲癩、低能、犯罪者などがいないかどうかということであった⁽⁸⁷⁾。ただし優生学者のこうした考えは一般にはあまり受け入れられていなかった。潘光旦は調査で家世清白が重視されなかったのは、それが門戸相当の意味に誤解され、また清白の意味が理解されていないからだとしている。遺伝や優生を連想させるような字句は求婚広告のなかに見出すことはできなかった。

(5) 職業、財産

職業をあげた男性は8名（6.1%）で言及率は低いが、女性は21名（62.5%）で言及率はトップである。女性に職業を有することを求めるのは、全く新しい考え方である。たとえば、ある西洋医は病院を開設しようと思っており、医師もしくは相当の学識を有し、経済的独立の能力を持つ女性を条件に挙げた。別の医師は全科か産婦人科の医師を、教育界に従事する男性は小学で英文か歌舞を教えられる女性を求めた。陳問壽が「女性の経済問題を解決しなければ、社交公開や婚姻自由などはみな空談になってしまう」といい、魯迅も「娜拉走后怎么样」で、「人」となるべく家庭を逃れた女性が経済力を伴わない場合、女性の自立は失敗に終わるだろうと述べたように、当時、女性の職業は自立、社交、結婚などと密接に関わる重要な問題であった⁽⁸⁸⁾。しかし女性の職業を積極的に支持する男性は依然として少数派であった。

男性に対する要求では、扶養能力があること、高尚な職業を有するなど漠然としたものが多い。具体的な事例としては、女医が医師を求めるもの、教育界や外資系企業社員を求めるもの、月収100元以上を求めるものなどがある。21名のうち8名は財産があることを同時に要求しており、経済条件に対する関心の高さを示している。

財産をあげた男性は1名にすぎない。女性は10名（31.3%）おり、家産や恒産があること、家が豊かであること、家産数万、などの条件がある。逆に、貧富や財産を問わないという条件を示したのは、男性16名（12.2%）と女性2名（6.3%）であり、対照的な結果となっている。社会調査では男女とも財産に対する要求度は低いが、これは未婚の学生が結婚を神聖視し、経済条件を挙げることを潔しとしないためであろう。現実問題として結婚を考えた場合、経済条件はやはり重要であった⁽⁸⁹⁾。

(6) 容貌

容貌を挙げた男性は19名（14.5%）、女性はわずか1名である⁽⁹⁰⁾。後者は富裕な商人の

娘で、中学を卒業し、音楽をたしなむ、品貌端正な19歳の女性である。この女性の場合、相手への条件は極めて多く厳しいが、相手を選ぶのは本人ではなく家長のようである。容貌を表す言葉としては、端正、端麗、清秀、嬌艶などがある。19名の男性のうち10名が大学卒で、13名が相手に品格と学歴を、のこり6名が品格か学歴を求めている。逆に、職業、財産に言及する者は全くいない。容貌を挙げた男性は高学歴で、相手には学歴や品格などを求める一方、経済的側面は重視しないという共通点を持つ。種々の社会調査と比較して求婚広告における容貌の優先順位は極端に低いが、相手に写真を要求する者をここに加えてもいいかもしれない。男性13名、女性5名の増加となり、男性の言及率は14.5%から24.4%に、女性の言及率は3.1%から18.8%になる。

(7) 健康

健康を挙げたのは男女とも4名、これは男性で3%、女性で12.5%にあたる。具体的には身体健康、体格健全、隠疾や悪疾がないこと、などがある。本節冒頭で指摘したように、当時の社会調査で健康は相手に求める最も重要な条件の一つであった。甘南引の調査では既婚男性が妻に対して満足することの第2位が身体健康であり、逆に不満なことの第2位が病気がちなことであった⁽⁹¹⁾。既婚女性の調査でも、夫に対して満足することの第1位は身体健康であった⁽⁹²⁾。健康は家庭生活においてきわめて重要な問題であり、未婚者たちも十分に意識していたのである。ではなぜ求婚広告では重視されないのか。興味深い問題であるが、いまのところ手がかりはない。ついでながら、1980年代以降の求婚広告で多く言及される身長に関する記載が1920年代の求婚広告では自己紹介、相手条件ともに全く見られないことを指摘しておこう⁽⁹³⁾。

(8) 思想・意志

思想・意志を挙げたのは全て男性で20名(15.3%)いる。新思想や新知識を求める者が多い。そのほか、留学に同行すること、小家庭を築くこと、社会に服務すること、事業を共同ですること、自立心を持つこと、家庭平等の真義を理解すること、新孝運動(未詳)に携わることなどがある。20名のうち職業を条件に挙げたものは6名いる。男性全体で職業を条件に挙げたものは8名しかおらず、その大半が思想・意志を挙げていることになる。女性が職業を有すべきであるという考えからして新しい思想であり、両者の一致は決して偶然ではない。もう一つ興味深いことは、家柄を挙げるものが全体に比べてきわめて少ないことである(20名中3名)。この項目を条件に挙げた男性は新しい婚姻観、女性観の持ち主だとみてよい。しかし、いずれも自分の考えや行動に相手があわせることを求めるものであり、対等なパートナーを求めるものではなかった。

Ⅳ 求婚広告の意義

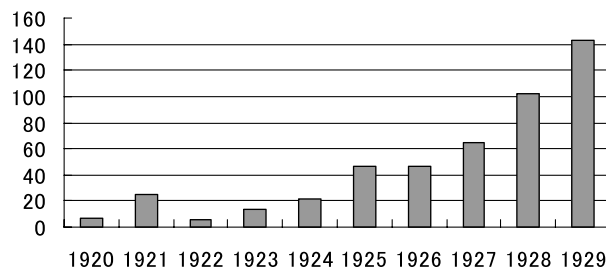
1 求婚広告の実際

言論界で求婚広告に否定的な意見が多かったにもかかわらず、求婚広告は1920年代を通して着実に広まっていった。表5は『申報』に掲載された求婚広告の年次別統計である。1924年までは年間20件前後であったのが、1925年以降は急速に増加し、1928年に100件をこえ、1929年には140件を突破した。単純に計算すれば、2日半に1件の割合で求婚広告が出ていたことになる。もはや求婚広告は日常茶飯事になったといっても過言ではあるまい。1926年に創刊された『婚姻報』には「徵求」欄が設けられていたし⁽⁹⁴⁾、天津『大公報』、『民国日報』、『新聞報』などの新聞にも求婚広告が見られるようになった。1931年には、「徵求女友」とか「徵求男友」とか「求婚」とか「覓侶」などの小広告は、ここ数年來つねに新聞に見られる」という状態であった⁽⁹⁵⁾。

求婚広告が普及するにつれて、それを商品広告として利用するものもでてきた⁽⁹⁶⁾。一例だけ紹介しよう。

わたくし〔康〕鳳珠は閩閩の家に生まれ、幼くして父母の教えを受け、閨房にて婚約を待ち、結納もあてがないままになっています。身体健全で精神活発な男性を得て連れ合いとしたいと思います。ここに陽暦8月13日に長距離競走を行い、健脚で一等になったものと鳳珠は結婚して夫婦になりたいと思います。ただし三つの条件があります。1、配偶者がいないこと。2、大学生であること。3、年齢は25歳以下であること。鳳珠は父母に寵愛されていますので、持参金として五十万元を贈ることができます。もし常々体育を重んじ、競走への参加を希望する若者は、北海路20号に申し込んでいただければ結構です⁽⁹⁷⁾。

表5 年次別求婚広告件数



一面上段に掲載されたこの広告には美女の写真がかかげられている。翌日、おなじく一面上段に「宣景琳為康鳳珠求婚啓事之啓事」なる広告がでて、康鳳珠とは映画女優の宣景琳であること、これが包天笑作、張石川監督の映画「富人之女」のプロモーションであることが明かされる。「富人之女」は、主人公の康鳳珠が恋と金のために道を踏み外していく物語である。康鳳珠は友人たちと一緒に見に行った運動会の競走で一番になった沈超然に心を動かし、友人に紹介してくれるよう求めた。友人は、レースで一等になったものと結婚し、結納金は五十万用意するという求婚広告を新聞に出すことを思いついた。結局、このレースで死者がでて大騒ぎになるのだが、映画のストーリーのとおり新聞に広告を出して、宣伝にしたというわけである⁽⁹⁸⁾。求婚広告はそれだけ人口に膾炙していたということになる。いやむしろ、これを機に求婚広告が人口に膾炙したのかもしれない。

求婚広告が定着すると、その「質」が当然に問題になってくる。実際、日本では求婚広告が犯罪に用いられることがあった⁽⁹⁹⁾。1920年代の中国ではいまのところ犯罪に悪用されたという事例は聞かないが、いたずらに使われた事例はある⁽¹⁰⁰⁾。また求婚広告を出した人に対していたずらをするケースもあった。1927年以降の求婚広告には、不誠実な人は決して応じないようにとの文言がたびたび見える。

求婚広告にはどれくらいの反応があったのだろうか。1928年10月28日、葉緑君という女性が「徴求男友」という求婚広告を出した。文言は極めて簡略で、「相当の学識があり、軽薄な習慣がない方は、どうか『申報』の私書箱、天字556号へ連絡ください 葉緑君」というものであった。同年11月7日、彼女は「徴求以後」という文章を投稿し、その後の状況を語った。彼女のもとへは数多くの手紙が殺到し、彼女は1人ひとりと面談することにした。1人1、2時間かかるとして、1か月で5～60人しか面談できず、このペースでは2、3か月かかってしまうという。この記述から推測すると百通以上の手紙が来たことになる⁽¹⁰¹⁾。

1928年5月29日にイギリス人男性が「英少年誠意徴婚」という広告を出した。この男性は7月17日に改めて広告を出し、「以前、誠意をもって求婚広告を本新聞に掲載したが、応じたものは多く不合格であった」ので再度広告を掲載したと記す⁽¹⁰²⁾。葉緑君ほどではないにせよ、複数の反応があったことがわかる。ただこれは単なるレトリックである可能性もある。

1928年、『生活』に章文卿という読者から手紙が寄せられた。彼は結婚相手を見つける機会がないことから、『生活』誌上に紹介欄を開いて、男女が知り合う機会を設けて欲しいと要望した。编者（鄒韜奮）はアメリカの婚姻紹介局 Matrimonial Bureau の例を挙げて⁽¹⁰³⁾、章君の意図はいいが……と前置きをした後、「現在の中国の状況から言えば女性がこれを利用することはまずないだろうし、現にこうした問い合わせが編集部によく来てい

るがすべて男性からであり、しかも本当の名前・住所を明らかにしたものはわずかしかない。それゆえコーナーを設けたとしても虚設に等しくなってしまうだろう。試みに章君の手紙を掲載するが、おそらく女性読者からの反応はないだろう」と応じた⁽¹⁰⁴⁾。ところが、編者の予測は裏切られた。章君は2通の返書を受け取ったのである。編者は往來の手紙を掲載したうえで、反応があったことを喜びながらも、危惧を表明するのを忘れなかった。曰く、「結婚は十分慎重でなければならず、よくよく調査をしなければならない。編者は調査の責任も負えないし、よくない結果に終わっても責任は持てない。……両親を交えて話を進めるべきで絶対に秘密裏にことを進めてはいけない⁽¹⁰⁵⁾。」

いまのところ求婚広告を通して結婚したという事例はわずか1件を見いだしたに止まる。皮肉にもそれは離婚に関わる資料で、1917年から1932年の北平（北京）の裁判所で離婚案件に関わった890組の夫婦のうち、求婚広告を通じて結ばれた夫婦が1組いたというものである⁽¹⁰⁶⁾。結局のところ、求婚広告は配偶者選びの主要な手段となることはなかったのである。

2 求婚広告と恋愛

求婚広告には恋愛があるのか。求婚広告をめぐる議論において、賛否の分岐点となったのがこの問題であった。思想・意志や職業を条件に挙げた男性たちは、確かに新しい婚姻観の持ち主であった。また、旧式の婚姻を批判し、新しい婚姻観をはっきりと打ち出すものもいた。たとえば沈志明なる人物は求婚広告の中で「婚姻が一生の幸福に関わることは誰もが知っており、旧式の結婚が不良であることは新青年の公認するところである」と主張した⁽¹⁰⁷⁾。またある男性は人物も家庭もともに新しいことを強調した。しかし、彼らが求めていたのが恋愛だったかどうかは別問題である。『婦女雑誌』の「我之理想的配偶」特集に収められた論文と比べると、求婚広告には恋愛がほとんど不在であるかの印象を受ける。唯一の例外は次の広告である。「年齢、容貌、学問などはすべて問題にしません。ただ本当の愛情さえあれば年老いるまで付き従いたいと思います⁽¹⁰⁸⁾。」しかし皮肉にもこれはタバコ会社の宣伝広告であった。

求婚広告には自由恋愛や「社交公開」の原則に相反する文言が随所に見られる。ここでは一夫一婦制をとりあげよう。中国（より正確にいうなら漢族）は古来、一夫一妻多妾制であり、一夫一婦制は清末に欧米から移入された新しい概念である。1920年代には、その概念は広く定着してはいたが、妾を持つ男性は多かったし、法律上でも蓄妾は許容されていた。男子学生の間でさえ、結婚して子供ができない場合は妾を娶ると答えたものが11%もあり、調査にあたった陳鶴琴をして「学生界にはなおこの種の腐爛観念を持つもの

が少なからずいる」と嘆かしめた⁽¹⁰⁹⁾。したがって、妾の募集が求婚広告にあらわれてもさほど不思議なことではない。その際、妻が病気であることがしばしば理由として挙げられた。たとえばある男性は妻が病気がちで跡取り息子をもうけられないことを、ある商人は妻が病気がちで家事を支えきれないことを、またある技師は妻が奇病にかかり治癒の見込みがなく精神的に非常に苦痛であることを理由に挙げて求婚広告を出した。一見理不尽ではあるが、妻が不治の病気にかかった場合、それが離婚の立派な理由となることは、いわゆる「七出」として伝統的に認められていた⁽¹¹⁰⁾。このほか、ある女性は「妻妾のいない者」を条件に挙げ、別の女性は正室として迎えることを要求しており、表面上は妻を募集しておきながら、実際には妾を募集するケースもあったことを窺わせる。このように求婚広告は新しい婚姻観や女性解放の主旨とは相容れないものをも許容したのである。「納妾」（妾を囲う）は受動的だが、「徴妾」（妾を募集する）は自発的であり、後者が優れているという議論はまさにこの点を皮肉ったものである⁽¹¹¹⁾。

そもそも求婚広告賛成派の説明によれば、求婚は当事者同士で行うことが前提となっていたはずである。その担い手は封建的な家庭の束縛から解放された自立的個人であり、家庭と自由恋愛はしばしば敵対するものとして語られた。しかし実際の広告は半数以上が友人や家族・親戚が代筆したもので、求婚者本人が広告を出すのはむしろ少数であった。また求婚広告が「家」同士の結婚を媒介することも少なくなかった。一例を挙げておこう。

滬瀆〔いまの青浦鎮〕の旧家の閨女で年齢は25歳くらい、女紅〔機織り、刺繍など〕に巧みで、家事をこなすことができます。幼い頃に父が亡くなってから、ずっと母のそばに仕えています。親友が結婚を勧めても婚約しませんでした。いま老母がしきりに催促するので、やむを得ず親友らが代わりに広告を掲載し求婚いたします。ただし、身家清白で、相当の職業を有していることを求めます。家産は問いません。初婚でも再婚でも結構です。まず先に文通して、女性側の調査に合格すれば、直ちにお返事をし、写真を交換して、正式に媒酌人をお願いして仲を取り持ってもらいます⁽¹¹²⁾。

この広告で強調された女性のセールスポイントは伝統的な女性観に添ったものであり、結婚の進め方も旧式結婚と同じである。文通の相手は女性本人ではなく、おそらく老母であろう。自由恋愛はおろか自由結婚の理想からも乖離した旧態依然たる結婚が求婚広告によって媒介されていたのである。他にも、相手の父親の年齢・職業・住所を知らせることを要求し、まず双方の父母が半年か1年往来して、互いの状況をよく了解してから結婚を決めるとか、家長が結婚を主宰する、家長がとうぜん婿選びをする、などの文言が散見し、

これらはとりわけ女性の求婚広告に多い。この点で、求婚広告を旧式結婚と変わりはないと断じた求婚広告反対派の主張は正しかったといえる。ただ、新しい婚姻観を主張する求婚広告が少ないのと同じように、旧態依然とした婚姻観を示す広告も数は少ない。圧倒的多数の広告は婚姻に対する理念や態度の表明をおこなわず、淡々と自己を紹介し相手への条件を綴っている。

求婚広告が必ずしも新しい婚姻観を反映するものではなかったとするならば、人々はなぜわざわざ求婚広告という新しい手段を使ったのだろうか。求婚広告のなかには「孤処無依」「長亡無依」「孑身孤居」など、自らの孤独な境遇を示す文言がしばしば見られる。ある男性は李陵の「蘇武に答ふる書」の一節をひいて、自らの境遇を匈奴の地で没した李陵になぞらえた。商店で働く30歳の男性は親友がおらず、紹介してくれる人がいないことを理由に挙げた。彼らの多くは中等以上の教育を受けていたが、家族から離れて上海という大都会で孤独感にさいなまれていた。また海外で暮らす中国人青年や上海に暮らす外国人青年も求婚広告を利用した。ロシア人の母を持つフランス人女性もまた「孑然一身」なるを以って広告を出した。帰るべき故郷もなく、なんとか上海で根を張って生きていかねばならないロシア人たちにとって、頼るべき結婚相手をみつけられるかどうかは死活問題となった。

本埠にやってきたロシア人女性は、人数が多く生活も困難である。いま、〔彼女たちの〕救済を図るべく、一種の「求婚新聞」を刊行することになり、今日出版される予定である。その意図は、こうした生活困難な女性を、イギリス、アメリカ、ドイツ人の独身男性と結婚させることにある。あわせて種々の規定を設けて、男性に騙されるのを防いでいる。同新聞の創刊号は、中国語、英語、ロシア語の三か国語でこれを発表する。また中国人や日本人でも、誠意をもって結婚相手を求めるのであれば、その求婚広告に応じることができるということである⁽¹¹³⁾。

こうして求婚広告は近代都市で根無し草となった孤独な青年たちに利用された。彼らが求めたのは配偶者にとどまらない。父母を求める広告もしばしば新聞に見える。入贅を求める広告は配偶者と保護者の双方を求めた。求婚広告は結婚市場で不利な条件を持つものにとっても福音となった。再婚相手を募集する広告は男性で9件、女性で2件ある。不幸な境遇のもの、たとえば父や母を亡くした者も求婚広告を利用した。こうした例は4件あるが、すべて女性である。

一方、資産家や大卒のエリートなど通常は結婚に困るとは思えない人々も求婚広告を出

している。またそれほど有利な条件を持たない者でも、すこしでも自分にあった相手を求めるために求婚広告を利用した。たとえば、ある中卒の青年は「結婚話は何度もあったがみな礼教に束縛された者であった」といい、求婚広告を通じて彼の周りにはいない「新女性」の相手を見つけようとした。

当時、男女の出会いは、「社交公開」にせよ旧式結婚にせよ親戚や友人などの紹介によるものが多かった。求婚広告も本人みずから行うものは少なく、多くは第三者の紹介という形式をとった⁽¹¹⁴⁾。求婚広告は男女を直接結びつけるのではなく、こうした紹介のネットワークに介在した。求婚広告は、紹介者がいないとか不利な条件をもっているなど、既存の紹介のネットワークから疎外されていた人たちに出会いの機会を提供する一方、既存のネットワークに不満な人たちには、より広いネットワークを通じて自分にふさわしい相手を見つけられるかもしれないという希望を与えた。求婚広告は新旧の婚姻観念との衝突を回避し、それによって多様な人々が様々な意図をもって求婚広告を利用することが可能になった。求婚広告は新しい婚姻観を体现できもすれば、旧式結婚をも成就せしめる、それ自体はいかなる特定の婚姻観をも伴わない媒介の道具であった。

V 1940年の求婚広告

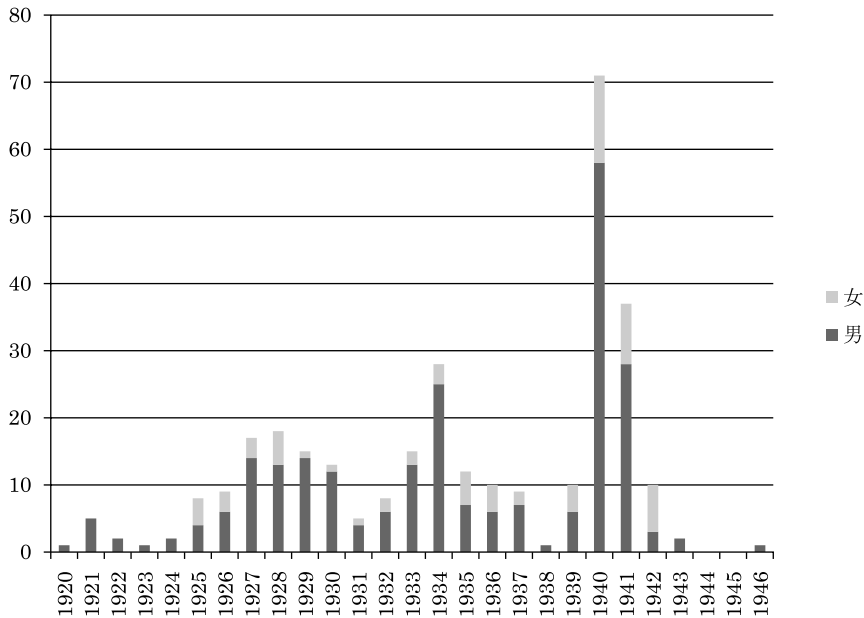
1 なぜ1940年か

1941年11月、「菲子」なる人物が求婚広告の制度を推進すべきだと主張する文章を『申報』に投稿した。「菲子」はアメリカでの事例を挙げた上で、求婚広告の利害を明らかにし、我が国でも是非推奨すべきだと主張した⁽¹¹⁵⁾。「菲子」は最後に、我が国の新聞でも最近ようやく求婚広告のようなものが見えるようになったと記すが、すでにこれまで示してきたとおり、1920年代末には求婚広告は日常茶飯事になっていたはずである。なぜ「菲子」は求婚広告を最近の事象として紹介したのだろうか。

この問題に答えるには、1930年以降の状況について明らかにする必要がある。表6は1920年から1943年までの『申報』について、各月の5、10、15、20、25、30の6日分に掲載された求婚広告の数を年度別に集計したものである。一見してわかるように、求婚広告は1940年に急増する。こうした動向が「菲子」のような感想をもたらししたのは間違いのない。このほか、1920年代後半、1934年にもピークがあるが、1940年は突出している。

1940年の『申報』に掲載された求婚広告はのべ280件、重複を除くと159件で、うち男性が108名、女性が59名である。1月から5月まではのべ12件しかなく、6月以降急増し、月平均は38.3件である。男女比は1.83:1で、1920年代と比較して女性の比率が高いのが特

表6 年次別求婚広告件数（1920-1946）



徴である。1件あたりの掲載数は1.76回で、1回のみの掲載が85件、2回の掲載が53件で、13回掲載された広告が1件ある。1920年代の求婚広告に比べて1件あたりの掲載数が少なくなったのは、少ない回数で目的を達することができたからだろうか。ここでは13回にわたって広告を掲載した「某君」について見ておきたい。6月13日の「徴伴」は次のようなものであった。

某君、蘇籍、38歳、大学中退、収入は中等生活の用に十分であります。中学程度で、家柄が清白で、性情が善良で、年齢が25歳から30歳の女性を募集し、妻にしたいと考えています。既婚、未婚、新寡〔夫を失ったばかりの女性〕を問いません。まず友達づきあいから始めます。どうか写真をつけて私書箱593号に投函してください。

同文の広告は6月9日にも掲載され、その後若干文面を変えたものが6月17日、7月5日、7日、9日、9月26日、10月12日に掲載された。その過程で年齢条件は21歳～34歳に広がった。また9月26日の広告では、実は妻が亡くなり、家事を取り仕切るものがないのが理由であることが明かされる。38歳で求婚広告を出すことを怪しむものがあるかもしれないと感じたのであろう。反応がないからそうしたのか、応募者とのやりとりでそう感じた

のかはわからない。10月21日には年齢条件が25歳～35歳に狭まり、「旧道徳を有し、新思想に富むもの」という不可解な条件が挿入された。12月19日、20日、23日、24日に掲載した広告は以下のようなものであった。

某君、蘇籍、高等教育を受けたことがあり、36歳、妻を亡くし子が一人います。家には男女の召使いがいて、中等の生活を維持できます。中学教育を受け、人品が高尚で、中年の、よくない嗜みを持たない女性を募集して伴侶にしたいと思います。まず友達づきあいし、それから結婚のことを相談します。応募者は自分で履歴を書いて、写真をつけ、上海郵便局私書箱五九三号まで投函してください。条件が合わなければお手紙はお返しし、必ず秘密を守ります。

ここではじめて子供がいることが明かされる。「某君」は翌年にもまだ続けて広告を出しており、相手選びはなかなか難航したようだ。本人の年齢を2歳さげるなど不誠実な点も見られるが、不利な情報を提示していることから見ても、求婚広告はまずまず健全に機能していたといえる。次に1940年のデータに初歩的な分析を加え、その特徴を考察しよう。

2 自己紹介

表7は自己紹介における各項目への言及率を男女別にまとめたものである。男性で最も多く言及されるのは年齢（1920年代には3位）で、次に職業（同、1位）、学歴（同2位）、籍貫（同、7位）、婚歴と続く。女性では年齢（同、1位）がトップで、学歴（同、2位）、

表7 自己紹介における各項目への言及率（1940年）

男性		女性	
項目	言及率（％）	項目	言及率（％）
年齢	81.5	年齢	89.8
職業	71.3	学歴	76.3
学歴	40.7	品格	37.3
籍貫	31.5	籍貫	35.6
婚歴	21.3	容貌	33.9
品格	17.6	職業	17.0
財産	13.0	性情	13.6
性情	9.3	家柄	13.6

表8 男性の自己紹介における言及率の変化

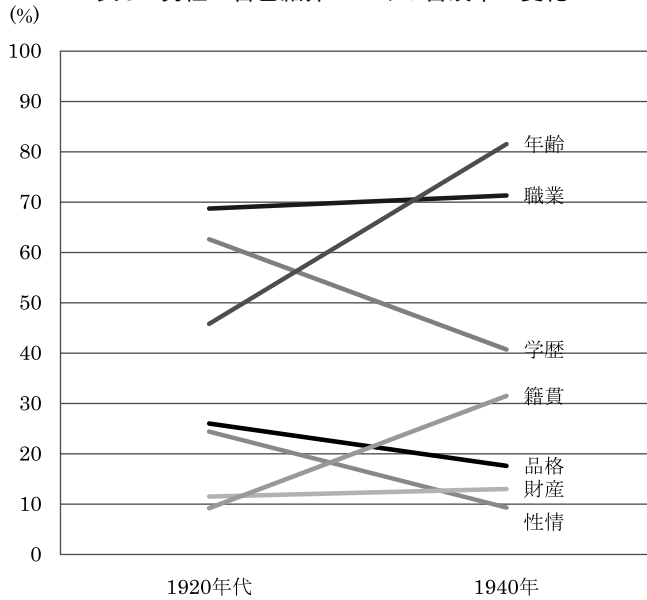
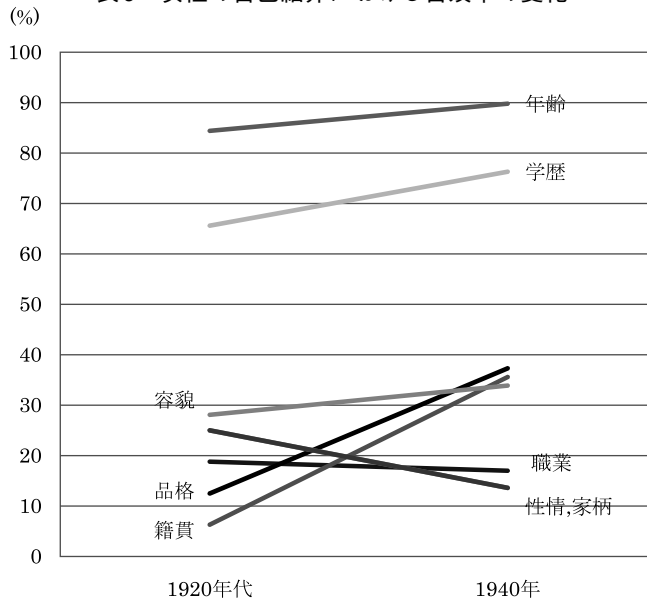
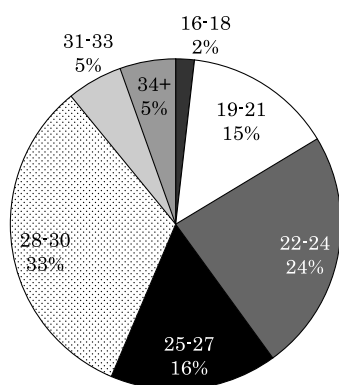
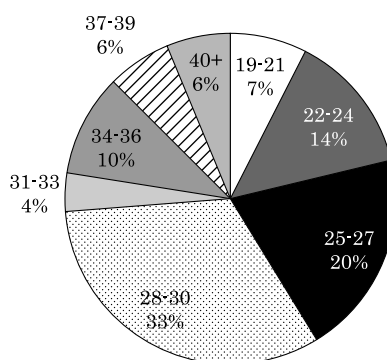
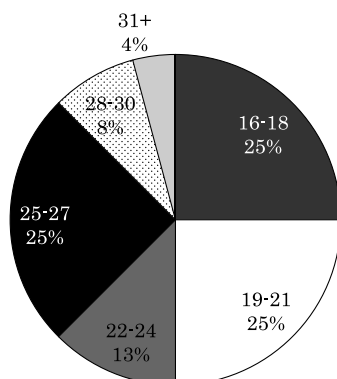
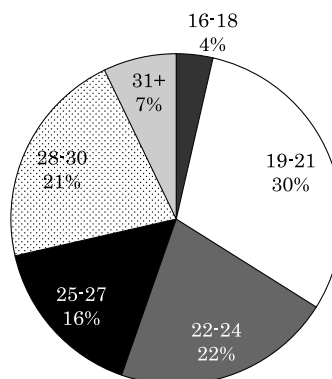


表9 女性の自己紹介における言及率の変化



品格（同、9位）、籍貫（同、10位）、容貌（同、3位）と続く。以下、各項目について簡単な分析を行う。表8、9は主な項目について1920年代からの変化を示したものである。男性では年齢と籍貫の増加、および学歴の減少が、女性では品格と籍貫の増加、および性情、家柄の減少が顕著な変化として指摘できよう。

表 10 求婚男性の年齢分布
(1920年代)表 11 求婚男性の年齢分布
(1940年代)表 12 求婚女性の年齢分布
(1920年代)表 13 求婚女性の年齢分布
(1940年代)

(1) 年齢 男性の言及率は81.5%、女性は89.8%で、両性ともに最も言及率が高い項目である。1920年代には過半数の男性が年齢を記載しなかったことを考えると、これは大きな変化である。平均年齢は男性が29歳（1920年代は26.5歳）で、最年少が19歳（同、17歳）、最年長が50歳（同、40歳）、女性は平均が24.5歳（同、22.3歳）で、最年少が16歳（同、16歳）、最年長が40歳（同、32歳）である。平均年齢は1920年代より男女とも2歳あまり高くなっている。表10～13は1920年代と1940年の男女別の年齢分布を示したものである。男性では過半数が28歳以上であり、全体的に高齢化している⁽¹¹⁶⁾。女性の場合、18歳以下が大幅に減少し、28～30歳の年齢層が大幅に増加したことで平均年齢が上がったことがわかる。

(2) 職業 男性の言及率は71.3%、女性は17%で1920年代と大きく変わらない。男性の職業の内訳は、商業9名、公司7名、洋行4名、銀行3名、教育3名、医師5名、政府機関3名、その他2名であった。女性の職業はほとんどが教員である。

(3) 学歴 男性の言及率は40.7%で、1920年代の62.6%に比べて大幅に減少した。具体的に学歴を記載した35名のうち、大学が31名、中学が4名であった。男性のなかで高等教育を受けたものが占める割合は28.7%で、1920年代の33.1%と比較するとあまり変化はない。したがって言及率減少の主因は中等教育を受けたものや、曖昧な形で教育を受けたことを示すものが減ったことにある。男性の教育が大きなセールスポイントであったことを考慮すると、学歴を提示しないものの多くは初等教育かそれ以下の教育しか受けていないと考えられる。女性の言及率は76.3%であり、1920年代より10ポイントちかく増加している。女性は38名が具体的な学歴を記載し、高等教育が4名、中等教育が27名、初等教育が7名である。女性の場合は男性とは逆に高学歴化が進んでいた。ただし女性の高年齢化、高学歴化が進んでいるとはいっても、高年齢・高学歴の女性が増えているわけではない。学歴に言及した女性の平均年齢は23.7歳で、高等教育を受けた女性の平均年齢は23歳、中等教育が23.5歳、初等教育が22.4歳で、曖昧な書き方をした女性の平均年齢が25.6歳である。学歴をはっきり示さないものは、いわゆる正規の学校教育をうけたものでなかった可能性が高い。以上から年齢を上げたグループと学歴を上げたグループは一致しないことがわかる。

(4) 籍貫 籍貫は男女とも1920年代に比べて大きく言及率があがった。これは一つには求婚広告の書式が整ってきたということでもあるが、移民が大量に流入してきたこの時期の上海において籍貫の持つ意味が重要になったということも考えられる。この点は1930年代の状況をふまえる必要があり、ここでは指摘するにとどめる。

(5) 婚歴 男性の言及率は21.3%、女性は6.8%である。婚歴はそもそも1920年代にはほとんど見られなかった項目である。男性のうち、未婚と記した者は15名、再婚であることを記す者が5名いた。女性4名はいずれも再婚である。ここには含めなかったが、処女であると特記するものもいた。男性が未婚であることをとくに強調したのは、多くの再婚者や既婚者が求婚広告の市場に参入しており、それと区別することで優位を示そうとしたからであろう。

(6) 性情・品格 性情への言及率は男性が24.4%から9.3%、女性が25%から13.6%へとそれぞれ激減している。これはロマン主義的傾向の減退とも見ることができるが、相手への要求では男性の場合32.4%で3位という高い位置を占めている。少なくとも性情は自己紹介の項目として重要でなくなりつつあったことは確かである。品格は男性では減少しているが、女性では12.5%から37.3%に急上昇し、3番目に多く言及される項目となった。

3 求婚相手の条件

表14は相手に対する条件の言及率を男女別に示したもの、表15、16は主な条件について1920年代からの変化を示したグラフである。男性が女性に対して挙げた条件のトップは年齢（1920年代は2位）、ついで学歴（同、1位）、性情（同、5位）、家柄（同、4位）、容貌（同、7位）と続く。女性の場合も年齢（同、2位）がトップで、職業（同、1位）、財産（同、5位）、嗜好（1920年代はなし）、学歴（同、4位）と続く。1920年代との変化に着目すると、男性では年齢、性情、容貌が増加し、学歴、品格が減少している。また1920年代にはほとんどみられなかった健康と財産が6位と7位に入っている。女性では言及率が総じて減少したが、このことは女性が男性に多くのものを要求できない立場にある、すなわち条件の不利な女性が増えたことを意味する。言及率の減少が大きいのは職業、品格、学歴で、結果として女性側の条件は経済的なものの占める比重が高まった。

(1) 年齢 相手の年齢を条件に挙げた男性は48.1%、女性は49.2%で、言及率は男女ともトップである。自己紹介での高い言及率とあわせて考えると、求婚広告において年齢はきわめて重要な要素であった。

(2) 学歴 男性の言及率は37%で2位、1920年代の51.1%には及ばないが、依然として重要な条件となっている。具体的な内訳は、初中（以上）が10名、高中（以上）4名、中学（以上）が12名、大学が1名であった。学歴を問題にした場合、中学程度が最も望まし

表 14 求婚相手に対する条件の言及率（1940年）

男性		女性	
項目	言及率（%）	項目	言及率（%）
年齢	48.1	年齢	49.2
学歴	37.0	職業	45.8
性情	32.4	財産	33.9
家柄	29.6	嗜好	17.0
容貌	24.0	学歴	15.3
健康	19.4	品格	15.3
財産	18.5	性情	13.6
品格	15.7	健康	8.5
		籍貫	8.5
		容貌	8.5
		婚歴	8.5

表 15 男性の相手条件における言及率の変化

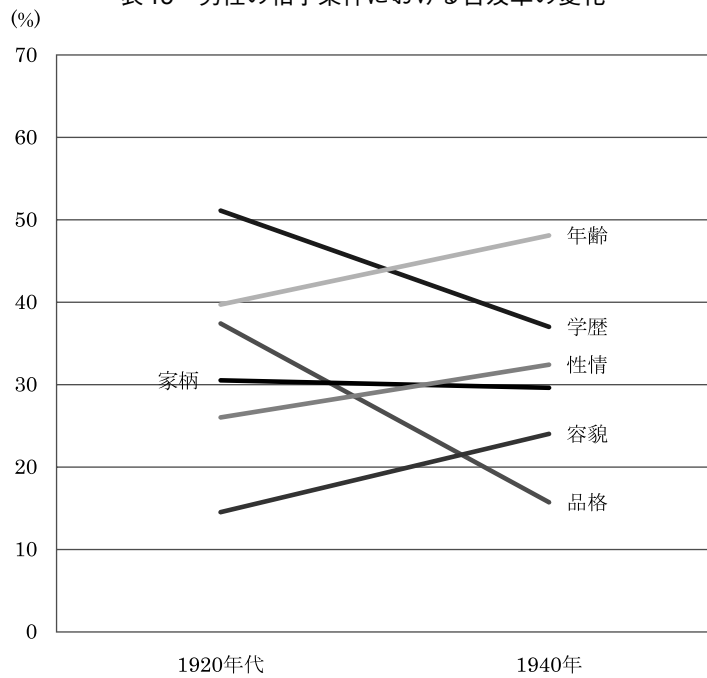
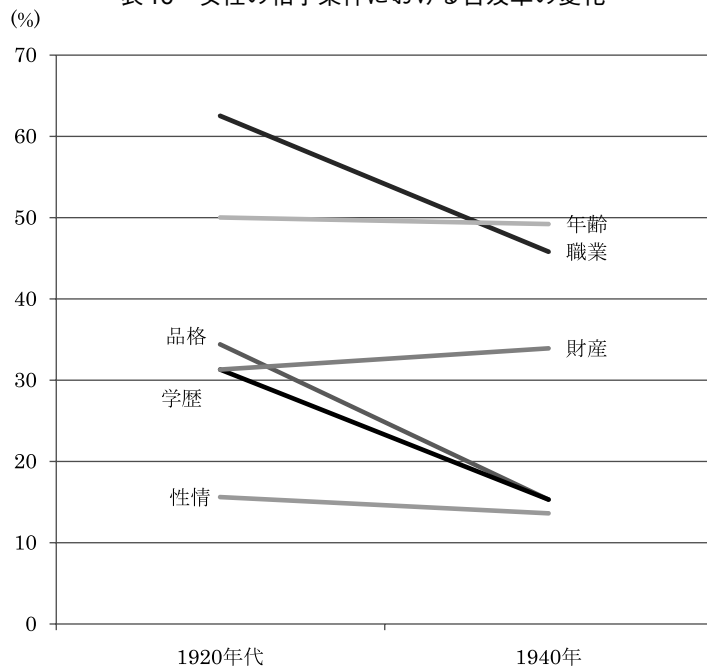


表 16 女性の相手条件における言及率の変化



いというのは1920年代と変化ない。女性の言及率は15.3%で、この数字は1920年代の31.3%と比べると半減である。男女を通じて学歴の重要性は低下しつつあった。

(3) 財産 女性の言及率は33.9%で1920年代と変わらない。一方、男性は1920年代には言及率が1%にも満たなかったが、1940年には18.5%に達している。男性求婚者は一般に経済面での優位を示そうとするが、1940年には女性（の家）の経済力に頼ろうとする男性が多く求婚広告を出すようになった。そのタイトルもずばり「徴婚借款」なる広告では、広告主は妻との離婚で負債をおったが、自己の資産が淪陥区にあって処分できないという理由で、2万元を工面してくれる淑女を募集した⁽¹¹⁷⁾。男性求婚者たちは生活に困ってというよりは、むしろアメリカ留学帰りの「某君」に典型的なように⁽¹¹⁸⁾、結婚を通じて事業を発展させる資金を獲得することをもくろむ者も多かった。これと関連して、1940年代の求婚広告に目立つのは「富婦」、つまり資産家の寡婦への言及である。1920年代の求婚広告には「婦」の字は見られず、寡婦でもかまわないと記載した求婚広告はわずか2件しかなかった。1940年の求婚広告には「婦」の字が14件、「寡」の字が8件みられる。また「棄妾」「棄婦」「棄」のように離婚、あるいは家を追い出された女性たちへの言及も13件の広告で見られる。なかには寡婦でもかまわないという消極的なものだけでなく、「徴婦」のように「やや資力のある婦・棄」を募集するという広告まである⁽¹¹⁹⁾。経済的な必要性の前に、好くも悪くも寡婦に対する忌避感が薄まり、伝統的婚姻観に変化が生じたことが読み取れる。あるいはこれは婚姻観の変化というよりは、寡婦に対する忌避感の薄い人びとが求婚広告の市場に参入したと理解すべきかもしれない。

(4) 容貌 男性の言及率は24%で、1920年代の14.5%に比べて大きく増えた。そもそも1920年代の言及率はやや低すぎる嫌いがあり、1930年代を主体とする『大公報』の統計では41.79%に達している。なかには「美貌の女性を募集して友人としたく、入贅でもかまいません」と、とにかく美しくさえあればどんな条件でもよいというような求婚者もいるが⁽¹²⁰⁾、これはまれなケースである。1920年代で述べたように、写真を要求するものを加えると、40.1%となり、『大公報』の数字に近づく。

(5) 健康 男性の言及率は19.4%、女性は8.5%である。1920年代には相手の健康に対する条件を挙げる男性はわずか3%しかおらず、健康への関心は低かった。『大公報』では男性の言及率が32.84%、女性が12.5%と『申報』に比べて高くなっている。求婚広告で健康への関心がにわかに高まった正確な理由はわからないが、戦乱の時代にあつて身体が資本とみなされるようになりつつあったのかもしれない。

4 1940年の求婚広告の特徴

1940年には求婚広告に商業化の兆しが見られる。「大東信託所」はそうした事例の1つで、7月17日を初出として12月12日まで、のべ18件の求婚広告を出した。同社はこの間に16名の女性の求婚広告を掲載した。一例を挙げておこう。

大東信託所、白克路〔いまの鳳陽路〕珊家園福源里、電話94651。電報を代わりに打ちます。広告を代わりに出します。原稿を代わりに作成します。私書箱をお貸しします。1、某女士、30歳、蘇籍、師範卒、夫は亡くなっており、いま身請けされて終身を託したいと考えています。某小姐、21歳、蘇籍、初級中学程度、体は健康で姿は美しいです。友人として引き合わせるのを代行しています。某女士、年23歳、中学卒、いま某産科学校に在学中、両親はともに亡くなっています。結婚相手として引き合わせるのを代行しています。まず友達づきあいから始めます。2、子供が多くて育てることができず、他人に預けたい方は、こちらへ来ていただいて相談することができます⁽¹²¹⁾。

この広告からわかるように、大東信託所は結婚の斡旋のみならず、幅広い事業を手がけていた。彼らが紹介した女性はみな小学～中学程度の教育を受けていたが、あるいは夫に先立たれ、あるいは両親がおらず、その境遇はおおむねよくなかった。広告の内容も、彼女たちの年齢、学歴と家族の状況を簡単に述べるだけで、相手に条件を提示することはない。上記の広告に挙げられている30歳の女性は師範学校を卒業後、小学校の教員となり、そのご売春婦に身を落としたようである。他の女性は1回か2回載るだけであったが、この女性は条件がわるいせいか7回も掲載された。応募者は直接大東信託所にいって面談することもできた。1940年の求婚広告で女性の割合が高いのは、大東信託所のような結婚紹介所が一度に多くの女性の広告を掲げたことに一因があり、女性による投稿が急激に増大したわけではない。なお、日本との比較で興味深いのは、日本では早い時期から私設の結婚紹介所による求婚広告が多かったことである。また日本では求婚広告が倫理的問題として議論の対象となることもなかったようである。

1940年の求婚広告に新思想の息吹を感じることはまれである。「モダンを追求しない旧家の令嬢」「旧礼教の処女」「旧道徳を有する者」、果ては「旧時小脚」までが条件に挙げられた。ある38歳の寡婦は誠実で、年老いて妻がなく、子供が多く、教養のないことを条件にあげた⁽¹²²⁾。この広告を出したのは亡き夫の弟であるが、誰でもいいから嫁がせたいという雰囲気のみでとれる。また妾になるのを厭わない女性もいた。こうなると次のよ

うな広告と求婚広告とを区別するのは難しくなってくる。

公務の余暇の気晴らしのために、女性の伴侶を1名募集します。年齢は18歳から25歳、秀丽でプロポーションがよく、やさしく活発で、完全に自由で、ダンスが好きな方でなければなりません。職業女性か女学生のいずれでもかまいません。一切の費用を援助できます。上流の人士と交わりを結びたい方は、どうか申報の私書箱195号まで投函ください。それぞれ秘密は守りましょう⁽¹²³⁾。

某君、商売で上海に来ました。家族は郷里にいます。仕事の余暇が寂しいので、女友達1名を募集します。孤・棄・孀・婦を問わず、屈託がなく端正な方で、生活費の補助が必要であってもかまいません。誠意のある方は、申報の私書箱1630号まで投函してください。1日だけしか載せません⁽¹²⁴⁾。

このほか交際に対して明確に報酬を約束するような「援助交際」もどきの広告もある。本稿では結婚を前提としないこうした広告を統計から外したが、その判断は時として非常に困難である。

最後に、1940年になぜ求婚広告が急増したのかを考えておこう。それは言うまでもなく戦争と深い関係がある。

某大商家の娘、南京籍、年28歳、相当の教育を受けています。上海に避難してきて、暫時親戚の家にいますが、独り身で足手まといもおりません。きちんとした職業をもっている方を募集して終身の伴侶としたいと思います。中等の生活を提供できる方は、履歴を書いて本紙の私書箱1578号へ送ってください。条件があいでしたら、手紙で約束をして面談いたしましょう⁽¹²⁵⁾。

「孤島」とよばれた上海の租界は各地から避難民が押し寄せる一方、資金や物資も流入し、快楽と困窮が同居する奇形的な繁栄を遂げていた。租界の人口は1937年には170万人に満たなかったが、1938年には450万人を数えた⁽¹²⁶⁾。1938年に『申報』は一度停刊し、復刊後もしばらくは誌面が制限されていたため、人口の急激な増大は求婚広告の増加にすぐには結びつかなかった。1940年頃から様々な広告が誌面を賑わすようになるなかで、求婚広告が爆発的に増えたのである。その数は人口に比してけっして多いとはいえないが、ますます多くの人々が求婚広告を利用するようになったのは確かである。

1940年の求婚広告には、一方に快樂があり、一方に困窮があった。一方で遊び仲間を求める男性がおり、一方でいかなる条件にも甘んじる身寄りのない女性がいた。求婚広告はどうやら「社交公開」の議論からあまりにも遠く隔たったところに来てしまったようである。

1940年の求婚広告を特異な環境における例外として扱うことは可能である。しかし戦時下の上海で求婚広告が大きく発展したことは事実である。住み慣れた環境をすて、見知らぬ世界にやってきた多くの戦争避難民は求婚広告に未来への可能性を見いだした。求婚広告は人と人を結びつける道具であり、人びとの疎外感が高まれば高まるほど、その真価を発揮するのである。

お わ り に

清末、纏足の解放と女子教育の振興が叫ばれる時代風潮のなかで、求婚広告は誕生した。そこには新しい婚姻観や女性観が反映されていたが、恋愛は不在であった。清末の求婚広告は思想的な運動の一端に止まり、普及することなく終わった。当時はまだ求婚広告を受け入れる素地が社会の側に整っていなかったからである。

五四新文化運動の展開とともに自由恋愛、「社交公開」等の概念が男性知識人を中心に受容されていく中で、求婚広告は再び脚光を浴びるようになる。それは「社交公開」に代表される新しい思想から直接生まれたものではなかったが、新しい思想は求婚広告を正当化した点で、その普及に重要な役割を果たした。求婚広告は多少の反対を伴いつつも、道徳的倫理的な観点から非難の対象となることを免れることができたからである。

自由恋愛、「社交公開」等の新しい思想は求婚広告の前提でもなければ本質でもなく、それらは求婚広告がもつ多様な側面の一つであって、求婚広告は旧態依然とした結婚をも包摂しえた。求婚広告の特質は、新しい思想を実現するというよりは、都市という匿名の世界において、疎外状況にある人びとにネットワークを提供するという点にこそあった。都市で「孤島」化した人びとは求婚広告に一縷の望みを託したのであり、1940年の「孤島」上海は求婚広告がその本領を発揮するまたとない機会を提供したのであった。

最後に本稿での結論がなぜ趙良坤のそれと異なるのかについて私見を述べておきたい。すぐに思い浮かぶのは資料の違いである。趙が扱ったのは天津の『大公報』で、時代は主として1928～1937年の10年間であった。一方、本稿で扱ったのは上海の『申報』で、時代は1920年代と1940年である。両者の間には、天津と上海という場所の違い、『大公報』と『申報』というメディアの違い、1930年代と1920年代および1940年という年代の違い、

81件と320件という資料の量の違いがあり、どの要因が結論の違いに大きく作用したかはさらなる比較研究が必要となる。たしかに『大公報』の求婚広告には旧式結婚を連想させるような表現は少ない。だからといって求婚広告を旧式結婚から自由結婚へという「近代婚姻闘争史」の一つのメルクマールとして、家長制の弱化と婚姻の自由の増大に結びつけるのはいささか短絡にすぎるのではないだろうか。これまで求婚広告はその目新しさ、あるいは進歩的な点が注目され、婚姻制度（の発展）と結びつけて論じられてきた。しかし求婚広告はいわば社会の鏡であって、そこには婚姻制度のみならず当時の社会のさまざまな矛盾・問題が映し出されている。求婚広告は多様な解釈が可能であり、「近代婚姻闘争史」というストーリーに回収するのではなく、そこに当時の社会を理解するさまざまな手がかりを読み取っていくべきであろう。

註

- (1) 劉達臨『20世紀中国性文化』上海三聯書店、2000年、19頁。1980年代以降の求婚広告については、数多くの研究がある。ここでは代表的な研究を挙げるにとどめたい。初期の代表的論文としては、張敏傑「從“徵婚廣告”這個窗口望去」『社会』1984年5期があり、1982年から83年にかけての『市場報』と『經濟生活報』に掲載された求婚広告を分析した。李銀河「当代中国人的择偶標準」『中国社会科学』1989年4期は求婚広告の分析から配偶者選択のパターンを導き出し、それを異文化におけるパターンと比較して、中国的特徴を示した。長期にわたる求婚広告を比較・分析し、配偶者選択観の変化を追った研究として、童輝傑「中国人择偶模式在十年中的变化」『江西師範大学学报（哲学社会科学版）』2001年2期、錢銘怡、王易平、章曉雲、朱松「十五年来中国女性择偶標準的变化」『北京大学学报（哲学社会科学版）』2003年5期、朱松、董葦、錢銘怡、王易平、劉興華「十五年来中国男性择偶標準的变化」『心理与行为研究』2004年4期などが挙げられる。李煜・徐安琪『婚姻市場中的青年择偶』上海社会科学院出版社、2004年は求婚広告が必ずしも一般的な配偶者観を反映するとは限らないと従来の研究方法を批判し、訪問調査を併用した。この際、遡及調査も行って、50年にわたる配偶者選択観の変化を跡づけた。これらの研究は社会学、心理学的関心から、統計の分析に力点がおかれ、求婚広告という現象の背景や歴史に言及するものはまれである。
- (2) 拙稿「1920年代的徵婚廣告」李長莉、左玉河編『近代中国社会与民間文化』第2輯、社会科学文献出版社、2007年。なおこの報告を発表したのは2005年8月である。
- (3) 高年齢未婚者の問題については張萍『中国の結婚問題』新評論、1999年を参照。
- (4) 趙良坤「近代中国徵婚廣告探析—以『大公報』為例（1900-1937）」修士論文、四川大学、2006年。
- (5) 清末の2件の求婚広告については数多くの研究がある。代表的なものとして夏曉虹『晚清女性与近代中国』北京大学出版社、2004年、劉志琴編、閔杰著『近代中国社会文化変遷録』第2巻、浙江人民出版社、1998年などを挙げることができる。なお、求婚広告の嚆矢として蔡元培と章炳麟がしばしば取り上げられるが、蔡元培の求婚は新聞広告ではなく、章炳

- 麟の求婚広告はその存在がいまだに確認されていないため、ここでは取り上げない。
- (6) 拙稿「天足会と不纏足会」『東洋史研究』第62巻第2号、2003年9月。また梁景和『近代中国陋俗文化嬗変研究』首都師範大学出版社、1998年、87頁を参照。
 - (7) 『大公報』も1902年6月17日の創刊当初から不纏足、女子教育を提唱していた。
 - (8) 満漢の通婚が許可されたのは、光緒27年12月23日（1902年2月1日）のことである。
 - (9) 欧米では求婚広告は19世紀末に普及し始めたという（郭箴一『中国婦女問題』商務印書館、1937年、50頁）。
 - (10) 上海図書館編『汪康年師友書札』第2冊、上海古籍出版社、1986年、1157-1158頁。林は姉婿の林白水が蔡元培らと創設した愛国女学校に入るべく、4月に上海にきていた（『蔡元培年譜長編』第1巻、人民教育出版社、1998年、235-236頁）。
 - (11) 劉志琴編、閔杰著『近代中国社会文化変遷録』第2巻、浙江人民出版社、1998年、241-242頁では、これが初めての試みであり、本当の名前を公開できなかったのも致し方ないとする。
 - (12) 王は日本の求婚広告に着想を得たと思われる。日本における最初の求婚広告は、明治14年（1881）ころ、金沢の人、中山太郎左衛門が『石川新聞』にて娘婿を募集した広告とされる（石井研堂『明治事物起原』第一編人事部「新式結婚数様（四）新聞広告」）。
 - (13) 清末の自由結婚とは、親ではなく自分で結婚を決めることであって、恋愛の有無は問題にならなかった。明治日本でも事情は全く同じであった（菅野聡美『消費される恋愛論——大正知識人と性』青弓社、2001年、52頁）。
 - (14) 『読売新聞』1905年7月21日。
 - (15) 中村隆文『男女交際進化論——「情交」か「肉交」か』集英社新書、2006年、127-128、166-180頁。
 - (16) 『男女交際論』は『清議報全編』巻38に同じタイトルで抄訳された。
 - (17) 丸山真男『「文明論之概略」を読む』上、岩波書店、1986年、217頁。
 - (18) 夏曉虹『晚清社会与文化』302頁。
 - (19) 趙良坤「近代中国徵婚広告探析」。
 - (20) ただし1920年以前の『申報』をすべて調べたわけではないので、それ以前に求婚広告があった可能性はある。
 - (21) 陳益民主編『老新聞（1916～1919）』天津人民出版社、1998年、101頁。
 - (22) 林賢治『娜拉：出走或帰来』百花文芸出版社、1999年、2頁（許慧琦『「娜拉」在中国：新女性形象的塑像及其演變（1900s～1930s）』国立政治大学歴史系、2003年、133頁より引用）。許は、「五四時期の学者と青年はみな精神的に旧制度から逃れる集団出奔と集団行動の過程を経験した」と述べる。
 - (23) 陳独秀「孔子之道与現代生活」『新青年』第2巻第4号、1916年12月1日。
 - (24) 楊潮声「男女社交公開」『新青年』第6巻第4号、1919年4月15日。
 - (25) 漢俊「男女社交該怎樣解決」『婦女評論』第7期、1921年9月14日。
 - (26) 張東蓀「婦女問題雜評」『解放与改造』第1巻第8期、1919年2月15日。
 - (27) 樂瑤女士「對於男女青年社交的見解」『大公報』1928年5月10日。この見解に対して、馬殊相は、配偶者を選ぶためにだけに社交公開を主張するなら、真実の一部分しかみていないことになる、と批判した（馬殊相「從政治經濟的立場上觀察社交公開以答樂瑤」『大公報』1928年6月14日）。

- (28) 「男女社交之今日及改良方法」『大公報』1929年11月28日。
- (29) 沈雁冰「男女社交公開問題管見」『婦女雜誌』第6巻第2号、1920年2月。
- (30) その実例として挙げられるのが、北京中等以上学校学生聯合会である（康白情「北京学生会男女交際の先声」『晨報』1919年5月20日）。また工読互助団が恋愛の場を提供したという興味深い指摘もある（清水賢一郎「革命と恋愛のユートピア——胡適の＜イプセン主義＞と工読互助団」『中国研究月報』573、1995年）。
- (31) 張東蓀「婦女問題雜評」。
- (32) 〔李〕漢俊「男女社交該怎樣解決」。
- (33) 沈雁冰「男女社交公開問題管見」『婦女雜誌』第6巻第2号、1920年2月。
- (34) 『新聞報』1924年7月分。劍余「通訊」『婦女雜誌』第10巻第7号、1924年7月、1205頁からの転引。
- (35) 『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、福建教育出版社、2005年、240-241頁。
- (36) 『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、174頁。
- (37) 『民国時期社会調査』婚姻家庭巻、237頁。既婚者よりも未婚者に「社交公開」の支持者が多く、1930年のある調査では未婚男性の78.6%が賛成だったのに対して、既婚男性では59%となっている（『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、39頁）。この調査で明らかなように、「社交公開」と自由恋愛は別のものとして意識されていた。
- (38) 『申報』1927年5月16日。
- (39) 『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、4、20頁。
- (40) 『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、2頁。1930年の未婚の女子学生に対する調査では、自分で決めると答えた学生は10%であった。最も多かったのは自分で決めて親の同意を得るという答で、66.7%に達した（『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、62頁）。
- (41) 仲軒「社交公開者应具备之資格」『申報』1923年6月1日。
- (42) 『婦女雜誌』第10巻第1号、1924年1月、283頁。彼は手紙の冒頭で恋愛結婚について、「これは理想の学説なのか、それともあくまで社会で実行しなければならないのか」と問いかけている。現実と理想の間のあまりに大きな差異を前にして指針を失った彼に対して、章錫琛の返事は、どんな新学説も新制度も受け入れられるまでは時間がかかるから、今我々ができることは、それが理にかなっているということを宣伝することしかないというものであった。
- (43) 平平「我之理想的配偶」『婦女雜誌』第9巻第11号、1923年11月。
- (44) 卞煥章「徵婚与自由恋愛」『時事新報』1923年6月26日。
- (45) 章の恋愛観については、西槿偉「一九二〇年代中国における恋愛観の受容と日本——『婦女雜誌』を中心に」『比較文学研究』64号、1993年12月を参照。章の社交観は「男女社交的兩個疑問」『婦女雜誌』第9巻第10号、1923年10月などに見ることができる。また、1924年2月の中旬から下旬にかけて『婦女日報』でも求婚広告をめぐる討論が交わされ、求婚広告は「変相的媒婆」であるとの結論が下されている。
- (46) デビッド・ノッター『純潔の近代——近代家族と親密性の比較社会学』慶應義塾大学出版会、2007年、68-69頁。
- (47) デビッド・ノッター『純潔の近代』55、74頁。
- (48) 「求偶」は8月2日、3日の2日間掲載され、「男子求耦」は4～7日と9日に掲載された。
- (49) こうした認識は1920年代を通じてしばしば見られた。『婦女雜誌』第10巻第7号、1924

- 年7月、1191頁、では「広告結婚は欧米ではつとに盛行していた」と紹介し、「徵求女伴」『申報』1929年12月30日では海外から帰ってきた男性が「欧俗にならう」とことわって求婚広告を出している。
- (50) 『中国婦女問題』50頁によれば、日本では第一次世界大戦後、求婚広告が広まったという。たとえば『東京朝日新聞』では1914年5月1日に「朝日案内」という欄ができ、その翌日には最初の求婚広告が掲載されている。
- (51) 「徵婚」『申報』1922年12月25日と「徵婚」『申報』1923年3月26日は同一人物によるものと思われ、1件と数えている。前者は息子1人が対象であったのに対して、後者では2人目の息子も対象に加えている。
- (52) 同一人による文面の若干違う広告は別のものとして扱う。後述するように、本章で明らかにしたいのは、提示された内容がいかなるものであったかにあるからである。
- (53) 趙良坤「近代中国徵婚広告探析」によれば『大公報』の求婚広告の男女比は4.06:1で、『申報』とはほぼ同じであった。
- (54) 『大公報』では48字から211字であった。なお広告料は1928年頃で、1日1字あたり1分であった。
- (55) 自分のことに全く触れない広告が8件ある。うち1件が女性（葉緑君）である。これらは相手に要求する条件を一方的に提示している。
- (56) 1985年を例に挙げると、男性は年齢、身長、健康、職業、学歴の順で、女性は年齢、身長、学歴、職業、容貌の順であった。1995年になると、男性は年齢、身長、結婚歴、学歴、職業となり、女性は年齢、身長、結婚歴、容貌、職業となった（朱松ほか「十五年来中国男性择偶標準的变化」、銭銘怡ほか「十五年来中国女性择偶標準的变化」）。
- (57) 朱松ほか「十五年来中国男性择偶標準的变化」と銭銘怡ほか「十五年来中国女性择偶標準的变化」。
- (58) 麦惠庭『中国家庭改造問題』202-208頁。
- (59) この比率は、1990年以降の求婚者における高等教育修了者の割合とはほぼ等しい。
- (60) 鄒依仁『旧上海人口変遷的研究』上海人民出版社、1980年、106頁によれば、1930年の上海華界における職業構成は、農9.72%、工19.10%、商10.33%、学4.34%、家庭服務20.08%、無業18.21%であったという。1920年代の求婚広告とは対照的に、1980、90年代に求婚広告を出したのは多くが工場労働者であった。
- (61) 一得「女子的職業」『生活』第1巻第3期、1925年10月は女性の職業を、高尚、工作、販売、下賤、芸術、不正当に分類した。高尚に属する職業には、女子銀行經理、女教員、洋行女打字、女書記、女医生、女招待、女夥計が挙げられている。
- (62) 唐海『中国労働問題』光華書局、1927年（陳明遠『文化与錢』百花文艺出版社、2001年、76頁より引用）。
- (63) 趙良坤「近代中国徵婚広告探析」31-32頁。
- (64) 1985年の統計では、男性の要求は、年齢、人品、健康、結婚歴、身長であり、女性の要求は年齢、身長、学歴、職業、容貌である。1995年の統計では、男性が年齢、結婚歴、人品、容貌、身長であり、女性が年齢、身長、結婚歴、容貌、職業であった（朱松ほか「十五年来中国男性择偶標準的变化」、銭銘怡ほか「十五年来中国女性择偶標準的变化」）。
- (65) 表4の各調査はあらかじめ決められたカテゴリーに順序をつけるという方法を採用しており、表3とは統計の性質が異なる。

- (66) 女性本人が書いたと思われる広告は、女性の年齢が高く、要求も少ない。
- (67) 『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、22頁。
- (68) 『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、308頁。
- (69) 近年の求婚広告でも性情はさほど重視されているとはいえない。男性のほうがやや言及率は高いが、それでも5割強で、順位でいえば10位前後である。
- (70) 学歴の項目には、「粗知文字」「家庭教育」といった最低限の教育から、新知識や外国語の能力を要求する者まで様々な形の条件を含めている。
- (71) 高等教育の内訳は、女医1名、高等社会教育1名（イギリス人男性）である。
- (72) 張友鶴「我之理想的配偶」『婦女雜誌』第9巻第11号、1923年11月、86-87頁。また瑾瑜なる人物は知識界の女性の通弊として、外国留学生は博士か修士以上の学生でなければ結婚せず、中学以上の卒業生は当然大学卒業生と結婚すると述べている（「我之理想的配偶」『婦女雜誌』第9巻第11号、1923年11月、89頁）。
- (73) 苦海余生『婚姻指南』国民図書館、1922年、第6章「妻之選択法」。
- (74) 林珍「我之理想的配偶」『婦女雜誌』第9巻第11号、1923年11月、105頁。
- (75) 日本でも同じ現象がみられ、ノッターはこれを「教養型男女交際」と呼ぶ（デビッド・ノッター『純潔の近代』43頁）。
- (76) 『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、22頁。
- (77) 『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、72頁。
- (78) 『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、85頁。
- (79) 章錫琛「女学生的人生観」『婦女雜誌』第11巻第6号、1925年6月、『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、94頁。教育の本来の意義からすれば、こうした考えは批判されるべきであるが、一方で女子教育を普及させる一因となったことは紛れもない事実である。
- (80) 『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、11-12頁。
- (81) 『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、137頁。
- (82) 『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、24、32-33頁。
- (83) 『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、147頁。
- (84) 林熹「我之理想的配偶」『婦女雜誌』第9巻第11号、1923年11月、118頁。逆に、性欲の発達は男性のほうが早いから、男性のほうが年下であるべきだという意見もあった（胡焦琴「我之理想的配偶」『婦女雜誌』第9巻第11号、1923年11月、125頁）。
- (85) この項目は近年の求婚広告にはほとんど見られない。
- (86) 『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、78頁。
- (87) 『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、306頁。
- (88) 陳問濤「提唱独立性的婦女職業」『婦女雜誌』第7巻第8号、1921年8月。
- (89) 呉至信の調査によれば、妻の立場からみた場合、「生活困難」が離婚に至る最大の要因であった（『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、391頁）。
- (90) 近年の求婚広告では男性で4割前後、4～6位であり比較的重視される項目である。女性の場合は3割前後で、8～11位であり、男性ほど相手の容貌を重視していない（朱松ほか「十五年来中国男性择偶標準的变化」、錢銘怡ほか「十五年来中国女性择偶標準的变化」）。
- (91) 満足な点の第1位は性情温順、不満足な点の第1位は学問知識がない、であった（『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、133、137頁）。
- (92) 『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、233頁。

- (93) 当時、身長に対するこだわりが全くなかったわけではない。甘南引の調査では、自分より身長が高い女性を望む男性は9%、低い女性40%、同じくらいが30%、かまわない19%などとなっていた（『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、188頁）。
- (94) 「婚姻報広告」『申報』1926年12月14日。
- (95) 霄「徵友求婚」天津『大公報』1931年2月16日。
- (96) 「徵婚」（『申報』1925年10月24日）は生殖霊なる若返りの薬、「華曼麗女士徵婚啓事」（『申報』1928年5月10日）は萃衆煙公司のタバコの宣伝である。
- (97) 「康鳳珠求婚啓事」『申報』1926年8月6日。
- (98) 以上のあらすじは中国電影芸術研究中心・中国電影資料館編『中国影片大典 故事片・戯曲片 1905-1930』中国電影出版社、1996年、64-65頁による。
- (99) 「求婚広告を利用し卅余名を売飛ばす」『読売新聞』1927年12月22日では横浜の男が「求縁当方資産数十万円」なる新聞広告を出して女性を誘拐し、売り飛ばしていたことが報じられた。同様の事件は『東京朝日新聞』1927年9月14日、1932年1月15日、1934年7月5日にも見える。
- (100) 朱志鳴「徵婚趣聞」『時報』1926年1月16日。
- (101) 葉縁君は同年9月9日に「我理想中之男友」なる文章を『申報』に投稿していた。そこには「人となりが誠実であって軽薄ではないこと」から始まって14条にわたる条件が列挙されていた。かくも多くの条件をクリアする男性は少ないであろうから、おそらく単に女性が広告を出したということで多くの男性が応じたのであろう。また1930年代以降のことと思われるが、偽の求婚広告を出して、その返事を編纂して恋文集を出版したという逸話を趙良坤が紹介しているが、真偽は定かではない（趙良坤「近代中国徵婚広告探析」）。
- (102) 「誠意」といいつつ、最初の広告では年齢を27歳といい、2度目の広告では30歳とする。これをもって求婚広告全般の信憑性を推し量ることはできないが、いくらか誇張が含まれていることは間違いない。
- (103) 「婚姻紹介所」も一つの選択肢であったが、こちらは実行されなかった。1931年には張鈞霖なる人物が婚姻紹介所の設置を申請したが、内政部から許可が下りなかった（『大公報』1931年3月11日）。のち、薇子なる人物はドイツの例を挙げて国立の婚姻紹介所の設立を提案している（『北洋画報』1936年2月27日）。
- (104) 編者「一個総答復」『生活』第3巻第49期、1928年10月21日。
- (105) 章文卿「介紹婚姻居然有点意思」『生活』第4巻第3期、1928年12月2日。
- (106) 『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、400頁。
- (107) 「代同学徵婚」『申報』1927年8月27日。
- (108) 「華曼麗女士徵婚啓事」『申報』1928年5月10日。
- (109) 『民国時期社会調査叢編』婚姻家庭巻、10-11頁。
- (110) 1930年に頒布された民法では、少なくとも理論上は、女性もまた男性の不治の病気を理由に離婚を提出することができるようになった。
- (111) 小蓬「納妾与徵妾」『北洋画報』第1138期、1934年9月8日。
- (112) 「徵婚」『申報』1925年10月10日。
- (113) 『申報』1923年9月1日。
- (114) もちろん、本人みずからが広告を出す場合でも、あえて紹介という形をとったことは十分考えられる。

- (115) 菲子「徴婚制度的推行」『申報』1941年11月11日。
- (116) ただし男性の場合、1920年代の年齢への言及率が45.8%しかなかったことは留意すべきである。
- (117) 「徴婚借款」『申報』1940年1月12日。
- (118) 「徴伴」『申報』1940年11月10日。
- (119) 「徴孀」『申報』1940年10月12日。
- (120) 「徴友」『申報』1940年10月7日。
- (121) 「大東信託所」『申報』1940年9月14日。
- (122) 「徴婚」『申報』1940年8月31日。
- (123) 「徴伴」『申報』1940年5月18日。
- (124) 「徴求女友」『申報』1940年9月25日。
- (125) 「徴婚」『申報』1940年9月8日。
- (126) 高橋孝助、古厩忠夫編『上海史』東方書店、1995年、213頁。